新定女子國文

改訂版

巻六

375.9
Y019
資料室

42298
教科書文庫
4
810
42－1933
2000301832

昭和八年一月十八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科

吉田彌平編

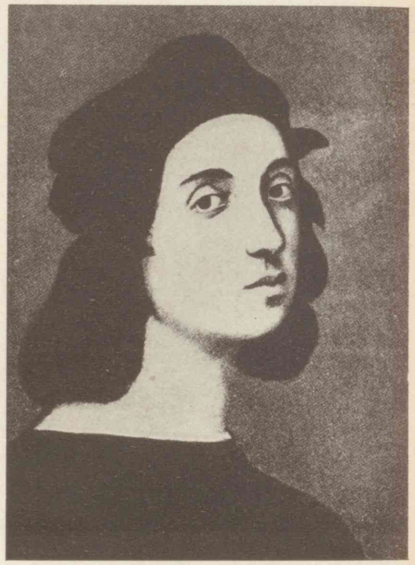
新定女子國文 卷六

改訂版

金港堂書籍株式會社

資料室
375.9
Y019

レオナルド
（自畫像）



ラファエル
（自畫像）

廣島大學圖書之印
広島大学 教 37747 図書

新定女子國文　巻六

目次

一　禁庭の野分（昭憲皇太后御作）……一
二　税所敦子君を誄す……高崎正風……三
三　西郷と大久保……山本有三……九
四　靜觀……吉田紘二郎……三
五　雁……千家元麿……亖
六　月下の笙……橘成季……亖五
七　良寛の歌……相馬御風……亖八

八　栗子……幸田露伴……四九
九　武藏野……國木田獨步……五四
一〇　鹽原……尾崎紅葉……五九
一一　法隆寺……北尾鐐之助……六五
一二　自畫像……三浦耀……七四
一三　鴫立つ澤……八二
一四　ものの上手……富士谷御杖……八六
一五　戲作三昧……芥川龍之介……八九
一六　ひろなりの皇子……隱士松翁……九九
一七　楠木正行の母……（太平記）……一〇三
一八　冬の感情……室生犀星……一〇六
一九　自然の愛……藤岡作太郎……一〇七
二〇　田園雜興……大町桂月……一一三
二一　をさなご……羽仁もと子……一一八
二二　世の中……一二三
二三　早春の賦……阿部次郎……一二六
二四　志士の文學……高須芳次郎……一三〇
二五　妹にさとす……吉田松陰……一四四
二六　生活と希望……下田次郎……一五四

廣島大學圖書之印

昭憲皇太后
明治天皇の皇后
藤原美子
一條忠香の第三女
大正三年崩御
御壽六十五

新定女子國文　卷六

一　禁庭の野分　（昭憲皇太后御作）

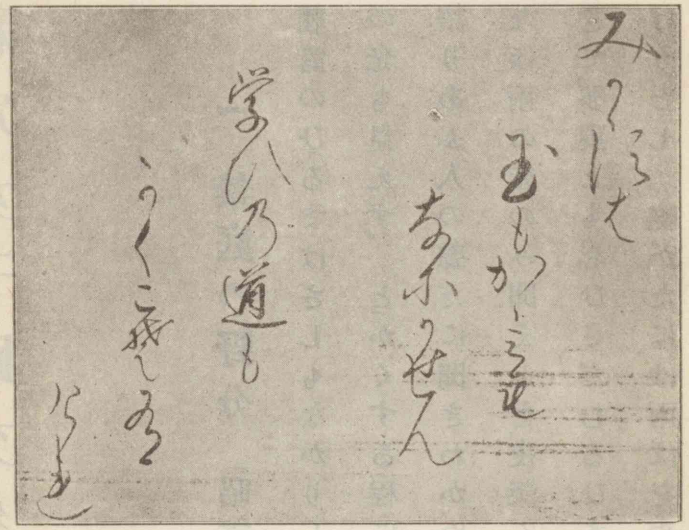
朝露のひるまはさしもなかりし空の、にはかにかき曇り、夕づつの光も見えず。　とかくする程に雨いたく降出でて、ほとり近く語りあふ人の聲だに聞きわかぬまでになりぬ。　閨に入る頃は、なほ雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに、雷さへ鳴りはたたきて、夢現とも思ひさだむるひまなく稲妻のきらめき渡る、いとけうとし。　曉がたには雨はをやみぬれど風烈しう吹出でて、宮の内もゆるぐばかりなるに、いとゞ目もあはず。　上には民の爲

上　明治天皇

皇太后　英照皇太后　孝明天皇の皇后　藤原夙子　明治三十年崩御　御壽六十五

御筆蹟　みがかずば玉もかゞみもなにかせん學びの道もかくこそありけれ

とて、長くも遠き境に出でましたるほどなれば、いかなる行宮にまし／＼て、この風の音に御心を惱まし給ふらん。皇太后の宮にはいかにおはしますにか。幼き宮たちも驚きやし給ふらんと思ひ續くる程に、夜も明けぬれど、未だ風靜まらで、いづこもおろし籠めたる、いと物むづかし。軒近き栗の枝の結べる實ながら吹折らるゝ音いと烈しく、御階の下の芭蕉も、筒井の傍なる柳も、皆折れふしぬ。今を盛と



昭憲皇太后御筆

科戸の神　科戸邊の神　風の神

稅所敦子　明治三十三年二月四日卒　年七十六

高崎正風　歌人　宮內省御歌所長　樞密顧問官　男爵　舊薩摩藩士　明治四十五年薨　年七十七

見えし眞萩も、名殘なくちり亂れたる、いとさびしく見ゆ。宮の內だにかく荒れぬるを、ましてあやしげなる賤が家居などは倒れぬるも多からんなど思ひやれば、すゞろに悲し。おしなべて實のりよしと聞きつる千町田の稻も吹きそこなはれつらんやなど、心にかゝりて、

國のため科戸の神もこゝろして稻葉の上はよきて吹かなむ

なほとやかくと胸をいたむるほどに、いつとなく靜まりて、日影まばゆく雲間にさし出でぬるに、おのづから人の心もおちゐにけり。

（昭憲皇太后御集）

二　稅所敦子君を誄す

高崎正風

嗚呼、税所刀自逝きぬ。わが無二の友たりし掌侍正五位税所敦子君逝きぬ。　忠孝慈貞なりし君が前半生の行狀は鹿兒島士民の普く知る所、その後半生の名譽は輦轂の下に隱れなし。　然れども、前後に通じてよく之を知悉せるは蓋し正風ならん。　正風が、歌によりて始めて君と相見しは、君が齡三十に垂んとせし時にして、正風が歳十九の頃なりき。　相見しは歌によると雖も、仰ぎ慕ひしは君が高節によれり。

君は正風と藩を同じくして京都に勤務せる税所篤之氏の繼室となり、嬰兒を懷にして、不幸にも夫に訣れたり。　嗚呼、君は京都に生れ、京都に成長し、京都に結婚せる優美艷麗なる婦人なりき。當時鹿兒島の風習たるや、同鄉人の外は、他所者(よそもの)として之を賤しみ、その姑の如きも京女の新に來りて同居することを快しと

税所敦子

せざりしにもかゝはらず、君は正當の理に循ひ、自ら奮ひて、遼遠殆ど外國の思ある鹿兒島に歸りて、その姑に事へき。　嗚呼、尋常の女子ならんか、夫の携へ歸らんとしても猶難色あらん、否離婚をも乞ふなるべし。　君が已に克つ勇氣に富み、志操の秀拔なりしことは、之を以ても知らる。　況んや、京都より齎しし衣服・調度の美なるものは、擧げてこれを前妻の出にして鹿兒島に在りし女に與へ、身には粗敝を纏ひ、日夜老いたる姑を看護し、その酒を嗜むを見て、手づから下物を調理して口腹に適せしめしかば、かつて君と同居するをだに厭ひ嫌ひたりし姑は、いまだ月をかさねずして、忽ち君を杖

順聖院
島津齊彬
鹿兒島藩主
安政五年(三五一八)薨
年五十

久光公
齊彬の弟
明治の初左大臣であつた
公爵
明治二十年薨
年七十一

近衛忠房
近衛忠熙の子
同篤麿の父

柱とも頼むに至れり。

國君順聖院公之を聞き、拔擢して世子の保傅とし、親しく行爲を觀察して大いに喜びて曰く、「吾人を得たり。」と。世子夭す。君悲歎に堪へず、自刃して殉ぜんとす。姑取縋りて泣きて曰く、「われ今御身を失はば、何を樂しみてかこの世に生残るべき。」と。君これが爲に止りぬ。

正風嘗て君に就きて歌談を聞く。訪ふ毎に一婢ありて君が傍を離れず。又、正風が詠草を返附せらるゝ毎に、必ず正風が母もしくは姉にあてて送らる。當時、正風迂疎にしてその何の故たるを解せざりき。後に思へば嫌疑を遠ざくる用意の周到なりしなりけり。嗚呼、忠孝慈貞、誰かこれに加へん。後久光公の女香蘭夫人、近衛忠房公に嫁せらるゝや、君扈して東上して老女と

筆蹟
なほざりにをらせじとてか鶯のうめの下枝をはなれざるらむ
敦子

なり、下僚を遇すること慈愛を極めたりき。

明治八年に至りて、坤宮女流の人材を徵し給ふ。正風薦むるに君を以てす。君順聖公の恩に感激し、近衛家を去るに忍びず。正風說くに大義名分を以てして、君始めて命を奉ぜり。爾來、兩

税所敦子讚

陛下御文學の諸務を掌り、御製・御歌の拜寫を始め、同僚宮女の爲に百事の質疑に應ずるまで、日夜安息するに遑あらず。君もと蒲柳の質しかも公事に服しては毫も攝養を意とせず。往年大いに病む所ありき。天皇陛下、君が年老いて勤勉の過度なるを憐み、家居して適意に出仕せしめんとし給ひ、特に正風をして內

彰善會　善行を表彰する會　男爵はその會長であつた

一月五日　明治三十三年

旨を傳へしめ給ひしが、君安んずること能はず、平素厭嫌せし牛乳を服して氣力を養ひき。癒ゆるに及びて、宮中に入り、執掌すること故の如し。

嗚呼、君が八百年以來、唯一人の女文豪たりしことは、世人皆これを知る。君夙く三寳に歸し、慈善を好むこと飲食よりも甚だしく、わが彰善會の起るや、最も熱心なる賛成者として金員を寄附せらるゝこと數ゝなりき。君、去んぬる一月五日、正風が病床を訪ひて告げて曰く、「明年七十七、謂はゆる喜字の齡たらんとす。いさゝか自ら壽すべし。」と。正風大いに之に贊し、爲に盛大なる宴を張り、朝野の詞藻を蒐集せんと期したりしを、今はつひに全く畫餠となりぬ。

正風今かくの如く忠孝慈貞なりし無二の友を喪ひ、身病褥に横たはりて葬場に會するをだに得ざるは、何らの慘ぞ、何らの痛ぞ。豈慟哭せざるを得んや。病をつとめて此の誄を草し、兒元彦をして代讀せしむ。嗚呼、哀しいかな。

元彦　正風の長男　海軍少佐　明治三十七年旅順に戰死した

○本課は原作の第三幕第二場だけを掲げた

西郷　西郷隆盛

大久保　大久保利通

山本有三　劇作家　本名は勇造　明治二十年栃木縣栃木町生

相看　衆鳥高ク飛ビ盡クシ。孤雲獨リ去ッテ閑ナリ。相看テ兩ナガラ厭ハズ。只敬亭山有リ。（唐の李白の獨坐敬亭山の詩）

伊藤　伊藤博文

三　西郷と大久保　　山本有三

大久保邸客間。

第一幕と同じ部屋。床に

　相看兩不厭。只有敬亭山。

と大書した幅が懸つてゐる。

伊藤が椅子にかけて待つてゐる。稍待ちくたびれた形で、幅などを見てゐる。

家令が這入つて來る。

家令「大變お待ちを願ひまして。もう間もなくお歸りになると

存じますが……」

伊藤「いや。――先程から感服してゐるんですが、見事な書ですね。

（幅の近くに寄り）雪篷といふのはどういふ人です。」

家令「何でも西郷さんが沖の永良部島へ島流しにおなりになつた時、この方もそこにおいでになつたので、お知合になつたのだとか伺つて居ります。たしか西郷さんは、このお方からいくらか書をお習ひになつたのぢやございませんかな。」

伊藤「ふん。それにこの句がいゝ。『相看て兩ながら厭はず。只敬亭山あり。』實にいゝ句だ。」

家令「雪篷といふ方は、この李白の詩が大層お好きで、筆をお執りになると、この句ばかりお書きになるんださうです。――あ、お歸りになりました。」

雪篷　川口氏　鹿兒島藩士　詩人で書家　西郷家の執事として世を終へた

沖の永良部島　奄美列島の一　德之島の南西にある方八粁足らずの孤島　屋久の永良部島に對してかくいふ

（大久保が這入つて來る）

大久保「どうも不在にして御無禮しました。何か急用ですか。」

伊藤「少々御意嚮を伺ひたいことがございまして。」

大久保「さうですか。勝さんと話が長くなつたものだから……」

伊藤「あ、あの件ですか。如何でした。お引受になりましたか。」

大久保「それは引受けて貰つたさ。征韓派の面々が去つた後、すぐ後繼内閣が組織出來ないやうであつては、天下に面皮がないではありませんか。なあに、五參議が揃つて辭職しようとも、何の事もありはしません。」

伊藤「實はその辭任問題について上りましたのですが、西郷さんの辭表はどう裁きましたものでせう。」

大久保「それは昨日岩倉公に御返事を差上げてあります。」

勝　勝安芳

征韓派の面々　西郷隆盛　板垣退助　江藤新平　後藤象次郎　副島種臣

岩倉公　岩倉具視

黒田　黒田清隆

伊藤「辭任を聽屆けよといふのでございませう。併し外の方と違つて、西鄕さんでございますからな。岩倉公も一方ならぬ御心配で、是非ともお差留めに相成りたいと仰になつてをりますのですが……」

大久保「いや、引留める要はありません。罷めたいといふものは罷めさせる方が却つてよろしい。その方が當人のためです。」

伊藤「けれども、それは如何にも忍びないことですから……」

大久保「いや、無駄な手數は省くことです。第一、引留めようとしたとて留るやうな西鄕ではありません。現に黒田が行つてさへ徒勞だつたではありませんか。」

伊藤「それはさうですが……」

大久保「陸軍大將だけは從前の通りといふことにして、參議並に近衞都督はお役御免になされるのが、この際至極の御處置と思ひます。」

伊藤（なほ躊躇しながら）「それでよろしうございますかな。」

大久保（きつぱり）「よろしいですとも。」

伊藤「西鄕さんの辭表が出た時、僕はあなたこそ第一にお引留めになるお方と思つてをりました。御意見の相違は相違。これはこれで、また別ですからな。」

大久保「いや、この際は引留めないのが本當です。彼を引留めないものこそ、彼を最もよく知つてゐるものといふべきでせう。氣儘にさせておやりなさい。その方が却つて西鄕もうるさくないでせう。」

伊藤「さうですかな。」

戊辰の役　戊辰は明治元年德川慶喜等征討のための戰

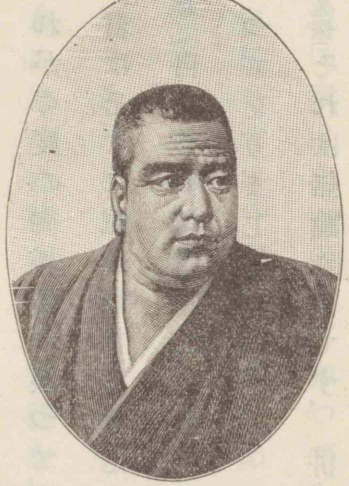
大久保「わたしはいつかはかういふ日の來ることを朧げながら豫期してゐました。今回のことがなくとも、これは早晩免るゝことの出來ないものです。それが今來たまでです。この事は戊辰の役に於て鐵砲の音がはたと止んだ瞬間に、わたしは豫感したことです。わたしと西郷とは兩立し難い人間です。當然離れるべき運星なのです。」

大久保利通

伊藤「併しお二人は今日まで殆ど一體のやうになつてお働きになつたのではありませんか。」

大久保「御一新前まではさうでした。世の中が不順であつたからです。夏のさ中に雪が降るやうな時勢であつたから、それが

目立たなかつたのです。けれども物事が緒に就いて、時候が追々定つてくれれば、夏は夏、冬は冬、それ〴〵その位置に歸るのが順當でせう。そして夏は夏らしく、冬は冬らしくあつてこそ然るべきものだとわたしは思つてゐます。」



西郷隆盛

伊藤「西郷さんもさう思つてお出ででせうか。」

大久保「さ、西郷はどう思つてゐますか。」

(間)

大久保「伊藤君、西郷が今度どうしてあんなに向きになつたのか、知つてゐますか。」

伊藤「向きになつたといひますと……。」

大久保「あの男はいつも默々としてをつて、滅多に自分の意見を吐かない男です。わたしが見込を述べると、『汝のいゝやうに。』さういつて決して逆らつたことがありません。功は人に讓り、自分はうしろに引下つてゐるといふ性質の人間です。それが今度の御評議に限つて、どうしてあんなに突張つたのか。君はそこに氣がつきませんでしたか。」

伊藤「自分の御持論を飽くまでも御主張になつたものと私は思つてをりましたが……。」

大久保「それは無論さうです。併し伊藤君、西郷は實は死にたかつたのですよ。朝鮮を自分の死場所にしたかつたのです。」

伊藤（無言　大久保の顏を覗くやうに見る）

三郎公　島津久光　齊彬の弟　公爵　明治二十年薨　年七十一

大久保「あの男は死を急いでをるのです。いつか私にこんなことを言つたことがあります。『己はもう一度死んだのだから、天地に家はないのだ。』知つてゐるでせう。彼は月照和尚と海に投じて、自分だけ助つた、あのことをいふのです。」

伊藤「存じてゐます。」

大久保「それからまた自分を取立てて下すつた順聖公樣がおかくれになつた時、西郷は追腹を切らうとして果さなかつたこともあるのです。それやこれやで、自分は主に後れ、同志に後れてゐるといふ慚愧の念が絶えず頭にあるのです。その上現在の三郎公にはひどく疎まれてをりますし……。」

伊藤「なるほど……。」

大久保「ですから、どうせ捨てる生命なら、朝鮮に往つて捨てたい。

そして自分の屍を橋渡にして、若い軍人どもを働かしてやりたい。手柄を立てさせてやりたい。から西郷は思つてゐるのです。わたしは彼のさうした心の中を思ふと、實際死なしてやりたく思ひます。死なしてやることが、寧ろ西郷を生かしてやることのやうに思ひました。しかしわたしまでがそんな心に引入れられるやうであつてはなりません。どんな事をしても、西郷には生きてゐて貰はなくつてはなりません。國家の大局から申すまでもなく、西郷一身の爲から申しても、斷じて彼を死なせることは出來ません。西郷は恐らくわたしを怨んでゐるでせう。しかしどんなに、どんなに怨まれても、わたしは彼を殺すわけにはいきません。――ところが伊藤君、わたしは嘗て西郷に死を迫つたことがあるのですよ。」

伊藤「あなたがですか。それはいつものあなたにも似合はない振舞ですな。」

大久保「わたしも若かつた。それはもう十何年も前の話です。丁度西郷が大島から召還されて、三郎公のお供をして京へ上る時のことでした。殿にはもと／＼御覺がよくないところへ、憂國の心からとは申せ、お言附を待たないで、西郷が少し取計らつたことをした爲に、彼は忽ち召捕られるやうな羽目に立至つたのです。わたしはその時つく／＼世の中が厭になりました。一心同體の西郷がこんなことになつては、もう討幕の望も何もない。こんな位なら、いつそのこと二人刺違へて死んでしまつた方がましだ、さう決心して彼を濱邊に誘ひ出したことがあるのです。――」

伊藤「それが今度は思はない事で刺違へてしまつたわけですね。」

大久保「人生の事思議すべからずです。西郷は月照と死なうとして死ねなかつた。わたしは西郷と死なうとして死ねなかつた。西郷がいつかわたしにいつたことがあります。『人間は死なうとしてもなか〳〵死ねるものではなく、生きようとしても案外生きられないものだ。』それを聞いた時には、それ程にも思ひませんでしたが、わたしは今その言葉をしみ〴〵思ひ出します。」

書生が這入つて來る。

書生「あの、西郷さんがお歸りになつてしまつたさうです。」

大久保「國へか。」

書生「はい。只今役所から知らせて參りました。」

大久保「さうか。——とう〳〵歸つてしまつたか。」

伊藤「すると西郷さんへの辭令は、どうしてもあなたが仰つた通りにするより外はありませんな。」

大久保（うなづく）

伊藤「では、私は早速歸つて、岩倉公に復命いたしませう。」

伊藤去る。

大久保書生を呼ぶ。

大久保「おいその懸物を懸けかへてくれ。」

書生「何を懸けませう。」

西郷隆盛筆

筆蹟 人事ヲ盡クシテ天命ヲ俟ツ 南洲書

吉田絃二郎
文學者
本名は源次郎
明治十九年佐賀縣生

大久保「何でもいゝ。南洲のものを懸けてくれ。」

書生幅を懸けかへる。それは

「盡人事俟天命。」南洲書」

と書した一書幅である。

書生「これでよろしうございますか。」

大久保「うん。」

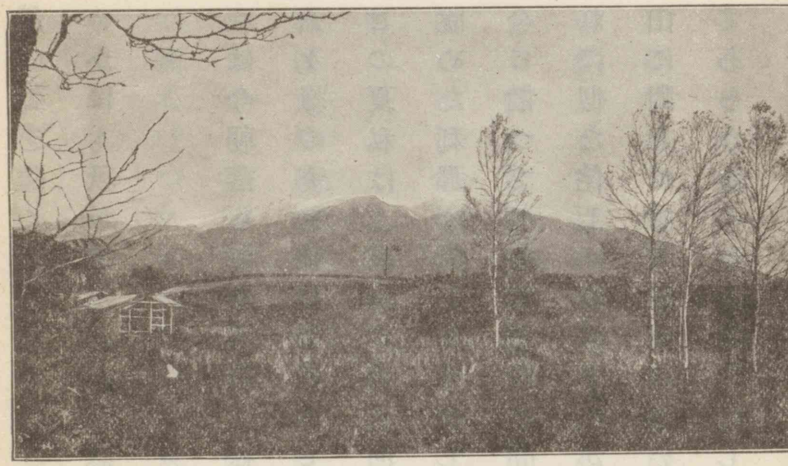
書生去る。

夕暮と共に部屋の中が次第に暗くなる。併し外はまだ明るい。大久保しづかに立つて床の間に香を焚く。西日を受けた障子に庭の松影が黒々と映つてゐる。大久保はじつと默したまゝでゐる。幕。（西郷と大久保）

四 静観

吉田絃二郎

八ヶ嶽
山梨長野兩縣の境の死火山
標高二八九九米



八ヶ嶽遠望

けさは落葉松の間から八ヶ嶽の姿がいつになくはつきりと晴れ晴れと見えた。雪溪であらうか、北側の崖に抱かれて白い流が見える。山全體が渾然として淡い薔薇色に包まれてゐる。白い雲がかすかに涌いては消える。二三日前から落葉松が落ちはじめてゐたが、今朝は殊に繁く落ちて行つた。

郭公も啼かず、深山鳥も啼かずなつた山は朝と夕暮にわづかに山

上高地　長野縣西部の溫泉地　標高一四六二米

槍　上高地の北　長野縣と岐阜縣との國境にある山　飛驒山脉（日本北アルプス）中の最高峯　標高三一八〇米

鳩の聲を聽くのみである。日中は一鳥啼かぬ靜寂に還るので、いかにも秋が來たといふ感じを抱かせられる。

私は今朝落ちてゆく落葉松の細かな葉の中に立つて梢越しに八ヶ嶽の姿を眺めつくしてゐた。

この夏、私は上高地の槍見河原から大空に聳えてゐる槍の姿を眺めた刹那に何となく悲しいやうな氣になつたことがあつた。今日散つてゆく落葉松の間から八ヶ嶽を眺めてゐると、やゝそれに似た侘しい感じを抱かせられるのであつた。

山に對して感ずるその尊いほどな侘しい心、悲しい心は一體何であらうか。私は山に面して自分の心の相（すがた）をじつと見つめてゐた。

還るべきところに還つて來たといふ心、それが山に對して感ずる心ではないか。

不斷はすつかり忘れてゐた靜かな不思議な世界が、今私の前に杳然として現れて來た。私は何の遮るものもなく、その死のごとく靜かな世界に觸れてゐる。

そこには風の聲一つない。私の微かな心臟の鼓動のみを感ずる。

私は人生について、自分自身について、考へなければならぬ幾多のものを持つてゐる筈である。それらのものが今はじめて私の胸にぴつたりと浮んで來る。何、何と一つ〳〵が概念的な形をもつて現れて來るのではない。人間の思惟の世界を絶した境に於てすべてのものが私の心に動いて來る。靜觀の世界で

ある。

私たちの魂はいつも靜觀の世界を求めてゐる。靜觀の世界を持つことによつて私たちの魂は富まされる。深くされる。靜觀の世界を持たぬ日の侘しさを思ふ。空虚さを思ふ。私たちの生活の多くの時間はあわたゞしい世間的な作爲のために費されてしまつてゐる。富める人、幸福な人たちにしても、やゝもすれば却つて多くの時間をさういふことのために割いてゐる。富める人、幸福だと思つてゐる人たちが必ずしも幸福でない所以はそこにある。

自分自身の心の相を靜觀するためにできるだけ多くの時間を持つといふこと、よき機會を持つといふことが一番大切なことである。もし理想的にいへば、一週間のうち一日だけ働いてその勞銀をできるだけ經濟的に使つて六日間冥想・讀書の時間を持つといふソローの行き方は最も賢い生活法であるかも知れない。しかしこのやうな生活法はソローのやうな人には可能であつたが、一般の人々に强ひるわけにはゆかない。しかしながら私たちはあわたゞしい日常生活の間に於ても、つとめて心をさういふ方面へ向けてゐるといふ一つの殊勝な心がけを持ちつゞけることによつて救はれる筈である。

ソロー Thoureau (1817—1862) 米國の文學者 コンコルドに森林生活を營んだ詩人

私は時々講演を頼まれる。しかし講演を終つた後ほど寂しいものはない。暗い心地がする。この經驗は大抵の人が持つてゐることであらう。出來るならば言葉を少くしたい。出來るだけ私たちの生活から不必要な言葉を葬つてしまひたい。

私は議論をあまり好まない。議論はやゝもすれば一人合點に

なり易い。議論をしないでも、いゝものはきつと人を惹きつける。議論は核心を離れて概念に墮し易い。

私たちの日常生活に於てもあまりに自分の生活を説明しようとするやうな生き方は膚淺なものになり易い。一つ〳〵自分の生活に理窟をつけて行かねばならぬやうな生き方はしたくない。僞善者の生活になり易い。

私は毎日落葉松の林の中に立つてゐる。

音もなく落葉松の葉は落ちる。足もとにはいつの間にか高原の野菊が雪のやうに白く咲亂れてゐる。梢をくゞつて來る風はすでに秋である。すべてが自然のまゝである。私は風のごとく自然な生き方を尊く思ふ。

子供たちの生活には概念がない。人間の理窟から割出された狹い範疇に押しこめられてゐない。だから子供たちの生活はいかにも暢然としてゐる。そこには僞がない。見せかけがない。見てくれがない。だから風のごとく自然であり、野の草を見るやうに伸び〳〵とする。

できるならば人はいつまでも子供のまゝでありたい。

藝術上に於てすら私は技巧を排したく思ふ。無論藝術から技巧を全然取去るといふことは不可能であるかも知れない。何等かの形に於て何等かの技巧は取殘されるにちがひない。しかしながら藝術家の頭にその末技的な技巧がこびりついてゐるかぎりはその藝術は生きては來ない。迫力に乏しい藝術は死ぬ。

私たちの生活上に於て技巧を弄することほど呪ふべきものはない。全然無技巧の生活に生きる人でなければ眞實の友でもなく、眞實の隣人でもない。

私たちの言葉から技巧を棄てなければならぬ。私たちの行爲から、動作からすべての衒と飾とを捨てなければならぬ。

あるがまゝの自分の心をもつて人に接しなければならぬ。自然に觸れなければならぬ。

あるがまゝの自分の心をもつて自然に接し、人に接することのできぬ人の鑑賞・味識・人生意識はつねに歪曲してゐる。

自分のあるがまゝの魂を押しひろげて秋の風に觸れるのでなければ、まことの秋の風の感じは見出されない。

自分のあるがまゝの魂をもつて人の眞心に觸れるのでなければ、私たちは永遠に人間の尊さについて人間の涙の深さについて知ることはできない。

あまり多く僞られ、裏切られた人たちの魂は、やゝもすれば人を疑ふことに馴れすぎてゐる。氣の毒なことであるが、さういふ人々は物を眞正面に見ることをしなくなつてゐる。僞られても僞られても人を疑ふことのできぬ心を持つといふことはなかなか困難なことではあるが、つとめて疑ふ心だけは頭を擡げないやうにしたい。

人の言葉をそのまゝ受容れることのできない人は彼自身の魂を牢獄につなぐ。

あるがまゝの心を以て自然に觸れることのできない人は自然そのものをすら牢獄につなぐ。

藝術を愛するといふこと、宗教を持つといふことも、畢竟はあるがまゝの心を生かさんがためである。素直な心、素直な眼を以て人を見、自然に觸れんがためである。

しかしながら或種の藝術、或種の宗教を持つことによつて、かへつて自然の心を失ふことがあり得ることも知らなければならぬ。すなはち玄人の藝術、技巧の藝術、たかぶれる宗教の場合に於て私たちはこのやうな傾向を見出す。

囚へられるといふことは警めなければならぬ。私たちは藝術を愛する。しかしながら狹く限られた藝術に囚へられてはいけない。人間は藝術以上である。宗教の場合に於てもこのことは言へる。

たとひ藝術は滅びても宗教は滅びても人間は存在する。そこなはれない人間の魂を持ち、眞人間の生活を生きるといふことは限られたる藝術や宗教を持つことよりも大切なことである。

（吉田絃二郎全集――靑塲）

千家元麿　詩人　明治二十一年東京市生。

五　雁

千家元麿

暖い靜かな夕方の空を、
百羽ばかりの雁が
一列になつて飛んで行く。
天も地も動かない靜かな景色の中を、不思議に默つて、
同じ樣に一つ〳〵せつせと羽を動かして、
黑い列を作つて、
靜かに音も立てずに横切つてゆく。

側へ行つたら翅の音が騒がしいのだらう、
息切れがして疲れて居るのもあるのだらう、
だが地上にはそれは聞えない。
彼等はみんなが默つて、心でいたはり合ひ助け合つて飛んでゆく。
前のものが後になり、後のものが前になり、
心が心を助けて、せつせ〳〵と勇ましく飛んで行く。
その中には親子もあらう、兄弟姉妹も友人もあるにちがひない。
この空氣も和らいで、靜かな風のない
夕方の空を選んで、
一團になつて飛んで行く
暖い一團の心よ。
天も地も動かない靜かさの中を汝ばかりが動いてゆく。
默つて、ずてきな速さで、
見て居る內に通り過ぎてしまふ。（千家元麿詩集）

六　月下の笙

橘成季

源義光は豐原時元が弟子なり。時秋未だ幼かりけるとき時元は亡せにければ、大食調の入調の曲をば時秋には授けず、義光には確に敎へたりけり。陸奧守義家朝臣永保年中に武衡・家衡等を攻めけるとき、義光は京に候ひてかの合戰の事を傳へ聞きけり。暇を申して下らんとしけるを御許なかりければ、兵衞尉を

橘成季　鎌倉時代の文學者　傳未詳
源義光　新羅三郎　義家の弟
豐原時元　伶人　笙の名人　鳥羽天皇の保安四年（一一二三）卒
永保年中　白河天皇永保二年（一〇八二）源義家陸奧守となる

鏡の宿　近江國蒲生郡鏡山村鏡山の北　今はさびれた

つか袋

辭し申して、陣に欄袋を懸けて馳下りけり。近江國鏡の宿に着く日縹の單狩衣に青袴着て、引入烏帽子したる男後れじと馳來るあり。怪しう思ひて見れば、豊原時秋なりけり。「あれはいかに。何しに來りたるぞ。」と問ひければ、とかくの事はいはずたゞ「御供仕るべし。」とばかりぞいひける。義光「この度の下向物騷がしきこと侍りて馳下るなり。伴なひ給はんこと

月下笙を吹く(月岡芳年筆)

尤も本意なれども、この度におきては然るべからず。」と頻に止むるを聽かず強ひて從ひ給ひけり。力及ばで諸共に下りて、つひに足柄山まで來にけり。

彼の山にて義光馬を控へていはく「止め申せども、用ひ給はで、これまで伴なひ給へること、その志淺からず。さりながらこの山には定めて關も嚴しくてたやすく通すこともあらじ。義光は所職を辭し申して都を出でしより、命をなきものになして罷り向へば、いかに關嚴しくとも憚るまじ、驅破つて罷り通るべし。それにはその用なし。速にこれより歸り給へ。」といふを時秋なほ承引せず又言ふこともなし。その時義光、時秋が思ふ所を悟りて、のどかに打寄りて馬より下りぬ。人を遠くのけて柴を切拂ひて楯二枚を敷きて、一枚には我が身坐し、一枚には時秋を据

空穗　靫　矢を入れて背に負ふ具

良寛　歌僧　越後の出雲崎生　天保二年(二四九一)寂　年七十四

相馬御風　文學者　名は昌治　明治十六年新潟縣糸魚川町生

ゐけり。空穗より一紙の文書を取出でて時秋に見せけり。父時元が自筆に書きたる大食調の入調の曲の譜なり。「笙はありや。」と時秋に問ひければ、「候。」とて懷より取出したりける用意のほどまづいみじくぞ侍りける。その時「これまで慕ひ來れる志定めてこの料にてぞ侍らん。」とて即ち入調の曲を授けてけり。「義光はかゝる大事によりて我らは身の安否知り難し。萬が一安穩ならば、都の見參を期すべし。貴殿は豐原數代の樂工、朝家要須の仁なり。我に志をおぼさば、速に歸洛して道を全うせらるべし。」と再三宣ひければ、理に折れてぞ上りける。（古今著聞集）

七　良寛の歌

相馬御風

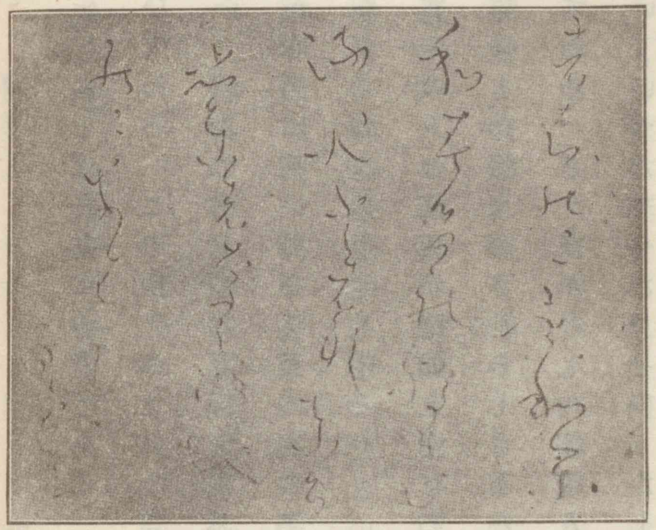
飯乞ふとわが來しかども春の野に菫つみつゝ時をへにけり

「飯乞ふ」とは「托鉢に」の意である。良寛はよくこの「飯乞ふと」を用ひてゐる。この「飯乞ふ」といふ言方がいかにも良寛らしくていい。現身の命をつなぐ糧を貰ふ爲に托鉢に出て來たのであるが、春野に咲いてゐる菫の花の美しさに心ひかれてそれを摘みながら時を過してしまつたといふのが一首の大意である。良寛その人の面目が躍如としてゐるではないか。しかも聊かの誇張も、衒氣も、わざとらしさもなしに淡々とありのまゝを歌つてゐる。「どうだ、かうした超越人の心境は俗人どもには分るまい。」といつたやうな見せびらかしや所謂禪坊主的な氣取などは微塵もなく、極めて自然にその境界を歌つてゐて、それでゐていかにも長閑な朗らかな自由人の超越的心境が現され、且さう

筆蹟

はちのこをわがわするれどとるひとはなしとるひとはなしはちのこあはれ

良寛書



良寛筆

した自由人の悠々たる生活の姿までが彷彿させられてゐる。

薪こりこの山かげに斧とりていくたびか聞くうぐひすのこゑ

この歌も良寛の生活の一面の窺はれるなつかしい歌である。衣食は里に出て貰ひ廻つたのであるが、薪は自ら斧をとつて林間に得たものと見える。しかもさうした勞苦の中からも彼は朗らかにうたふ鶯の聲に聞惚れることが幾度となくあつた。

この歌は良寛その人を念頭に置かずとも、私たちの心を惹きつけるに十分な自然の情趣が捉へられてゐる。客觀と主觀とが微妙な渾融を得てゐる忘れがたい歌である。しかも何等技巧上のたくらみがない。　こんな境地は空想や想像から「山がつが…」などとやられるとたまらなく不快な歌になるのであるが…

みちのべに菫つみつゝ鉢の子を忘れてぞ來しその鉢の子を

「鉢の子」は托鉢に出る時に持つて行く鉢で、鐵鉢・瓦鉢・木鉢などがあるが、良寛のは木製のものであつたらしい。無一物の生活を送つてゐる托鉢僧にとつては、施物を受取る爲の唯一の器であるところの鉢の子は最も大切な寶である。しかも彼はその生活上の至寶をすらも菫の花の美しさに心ひかれたあまり、路傍

ユーモア　滑稽　Humour

に置忘れるやうなことがあつた。「その鉢の子を」と結句に繰返したあたりには、いかにもよくそれに對する愛着の心が現れてゐる。

　みちのべに菫つみつゝ鉢の子をわが忘るれどもとる人
　　はなし

「とる人はなし」には、一味のユーモアとそして寂しみとが含まれてゐる。いづれもなつかしい歌である。

　草の庵に足さしのべて小山田の山田のかはづ聞くがた
　　のしさ

これこそ何の作意もない、ありのまゝのたゞごとうたである。しかし生活と歌とがぴたりと一つになつてゐる爲に、おのづとその境地に引入れられて行くやうに感じられる。

　をちかたゆしきりに貝のおとすなりこよひの雨に堰く
　　えなんか

　足引の山田のをぢがひめもすにいゆきかへらひ水運ぶ
　　見ゆ

　われさへも心もとなし小山田の山田の苗のしをるゝ見
　　れば

　秋さめの日に〳〵降るにあしびきの山田のをぢはおく
　　てかるらん

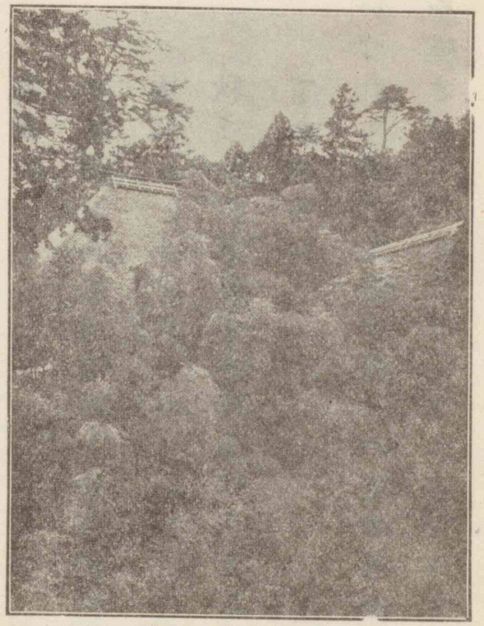
いづれも農人勞作の苦しみをおもひやり、人々と共に雨の多きを嘆き、日でりのはげしきに心をいためて詠んだ歌である。世外に超越してゐた良寛も、かうした心は常に失はなかつた。

　この頃は早苗とるらしわが庵はかたを繪にかき手向こ

孤庵　五合庵　越後國國上山の山腹にあつた小庵

そすれ

口碑にも良寛は春秋二期の農繁期には毎年農人たちの勞作の圖をかいて壁に揭げ、常にそれに向つて供養を怠らなかつたといはれてゐる。この歌の如きはさうした自らの行を有りのまゝ無造作に歌つてゐるやうでありな


五合庵

がら、限ない優情がこめられてゐる。「かたを繪にかき手向こそすれ」の調子の强さはたしかに主觀の强さの結果である。

山中の孤庵で夜中に遠くで非常を告げる法螺貝の音を聞いて、このひどい雨に川の堰が壞れでもしたのではないかと心配してゐた良寛、山田の乾くのを虞れて老の身ながら山坂を登り下りして田に水を運んでゐる人を見てその勞苦を察し涙ぐんでゐた良寛――それは正に尊い聖者の姿である。

さとべには笛や太鼓の音すなりみやまはさはに松の音しつ

これは又前の歌などとは違つた心境で、同じく山中に獨坐して人里の聲に耳傾けてはゐるものの此の場合の彼は全く別な心持である。この歌について私は嘗て次のやうに述べたことがあつた。

これは盂蘭盆の頃、しかも夜詠まれた歌であらう。笛や太鼓の音はおそらく盆踊のそれであらう。私は嘗て新暦の八月下旬

國上山　彌彦山の西にある小山

に數日間毎夜良寛和尚の住んでゐた越後國上山の麓にひらけた平野の間を歩いたことがあつた。そして毎夜あちこちの村で鳴り響く盆踊の笛や太鼓の音を聞いたことがあつた。月下の平野はいたるところ稻がふさ〳〵と穗を垂れ、その上に露が青く光つてゐた。遠くを見渡すと、平野はまるで海のやうに見えた。ところ〴〵に黑く見える村々の木立は、さながら浮島のやうであつた。さうして夢のやうな月夜の平野の光景を思ひ浮べながら此の歌を讀むと、さうした遙かあなたの人里の歡樂のどよもしを聽きながら、あの寂しい山中の草庵に孤坐してゐた人の心が、胸にしみこんでくるやうな氣がする。此の歌、表現の仕方に於てはかの「をちかたゆしきりに貝の音すなり……」の歌と殆ど同巧のやうに見えるが、しかし「みやまはさはに松の音

齋藤茂吉　歌人　醫學博士　明治十二年山形縣生

しつ」の下句の爲に全然ちがつた心境が開かれてゐる。「さはに松の音しつ」の表現は至妙である。「此の句は甚だ簡潔であつて而も無量の心を藏してゐる。」と嘗て齋藤茂吉氏も讚嘆したが私も同感である。

風は淸し月はさやけしいざともにをどり明かさむ老のなごりに

いざうたへわれ起ち舞はんぬば玉の今宵の月にいねらるべしや

こゝでは良寛は山を下りてすつかり人里に入りきつてゐる。口碑によつても良寛がいかに盆踊の仲間に入つて人々と共に踊り樂しむことを好んだかがわかる。この二首は心の合つた友人と酒でも飲みながら、折から聞えて來た盆踊の太鼓や笛の

音にそゝられて感興のあまり友人に詠んで示した作であらう。いかにも二首とも潑剌たる生氣が溢れてゐる。「風は淸し月はさやけし」の如き「いざうたへわれ起ち舞はん」の如き「いねらるべしや」の如き、誠にいき〳〵とした元氣の充ちた句である。良寬のたましひは靜寂の境に安住してゐたが人間としての良寬はあらゆるものと同化して遊んだ。

山陰の石間をつたふ苔水のかすかにわれはすみわたるかも

時に感興に乘じて衆と共に踊り明かす事さへあつた良寬も、我に返つて獨り靜かに世外のわが生きの姿を省みる時は、「山陰の石間をつたふ苔水の」それの如く微かに生きる自己を見出すのであつた。「山陰の石間をつたふ苔水の」は「かすかに」の序詞として用ひられたものであらうが、しかしいかにもよく彼みづからの姿を、心を攫んでゐる。比喩の如くにして然らず、自然と自己とが一如の境にあるかの觀がある。

月よみの光をまちてかへりませ山路は栗のいがのおほきに

これは彼の親友の一人であつた阿部定珍が秋の一日彼の草庵をたづね、時の移るも知らずに語り過して、ふと日暮近くなつたのに驚いて歸らうとするのを引留めて詠み與へた歌である。定珍の家は良寬の庵のある山のすぐ麓にあつた。（短歌講座）

幸田露伴　名は成行　文學者　文學博士　慶應三年（二五二七）江戸生

八　栗子　幸田露伴

籠（ざる）の中に栗子あり。其の數およそ百箇ほどあり。百箇ほどの

中には、すぐれて大きなるあり、大きからず小さからぬあり、小さきあり、きはめて小さきあり。一つ栗子あり、三つ栗子の中なるあり、端なるあり、夫婦栗子あり。百箇が百箇皆同じからず、それぞれに異なる大きさを異なる形して具したり。

或人其の栗子を食ふに、先づその百箇ほどの中の最も大にして最も好き形したるを取りて食ひ、次には殘れる中の最も大にして最も好き形したるを食ひ、又次には、又殘れる中の最も大にして最も好き形したるを食ひ、其の又次には其の又殘れるが中の最も好き形したるを取りて食ひ、食ふごとに毎に現在せるものの中の最も大にして最も好き形したるを食ひ、終に其の百箇ほどの栗子を皆食ひ盡くせり。

其の人は百箇ほどの栗子を食ひ盡くす間、常に最も大にして最

も好きものを取りて食ひて、一度も小さくて好からぬ形したるを食ふことなくて終れるなり。即ち其の人は常に〲最も優れたるものを取りて、一度も劣れるものを味はふこと無く終れるなり。

同じ樣なる籠に同じ數ほどの栗子あり。これもまた大きなる小さなる、それ〲に異なる大きさを異なる形して具したること、前に言へるとほと〲相異ならず。

こゝに人ありて、其の栗子を食ふに、先づ其の百箇ほどの栗子の中の最も小さくて最も好からず見ゆるを取りて食ひ、次には其の殘れる中の最も小さくて最も好からず見ゆるを取りて食ひ、其の又次には其の又殘れるが中の最も小さくて最も好からず見ゆるを擇み取りて食ひ、かくして終に百箇ほどの栗子を食ふ

に、毎に其の最も小さく最も好からぬのみを取りて、やがて之を盡くせり。

其の人は百箇ほどの栗子を食ひ盡くす間、常に最も小にして最も好からぬを取りて食ひて、かつて一度も大きくて好きを食ふこと無く終れるなり。即ち其の人は常に〳〵最も劣れるを取りて、一度も優れるものを味はふこと無くて終れるなり。

甲の人も乙の人も、其の食ひたる栗子の量と質とは同じきなり。されどその趣はいたく異なり。

甲の人は、常に其の最も優れたるを味はへるなれば、其の心は常に悦を抱き得べし。乙の人は常に其の最も劣れるを味はへるなれば、其の心は常に貧しかるべし。

されど甲の人は、其の實一つ〳〵食ひ進む毎に漸く小さく漸く

好からぬを味はふこととなれば、悲しきやうなる心地もあるべし。乙の人は、其の實一つ〳〵食ひ進む毎に漸く大きく漸く好きを味はふこととなれば、心悦びのせらるゝ方もあるべし。思ひ做しにして、甲の人も常に自ら是とし、自ら悦ぶを得べし。又思ひ做しにて、乙の人も常に自ら是とし、自ら悦ぶを得べし。氣の持方にて、甲の人も常に自ら慊らず、常に自ら悲しむべく、乙の人も常に自ら慊らず、常に自ら悲しむべし。

人の一つづつ年をとるは、猶一つづつ栗子を食ふが如し。たゞ幾許の栗子を食へる時、我が壽命の終りて其の栗子を食ふに堪へざるに至るやは測るべからざることなり。

栗子は人々の撰み取るに任せられたり。誰も汝此の栗子を取る勿れといふもの無し。（露伴全集――洗心錄）

國木田獨步
文學者
名は哲夫
下總銚子生
明治四十一年歿
年三十八

九　武藏野

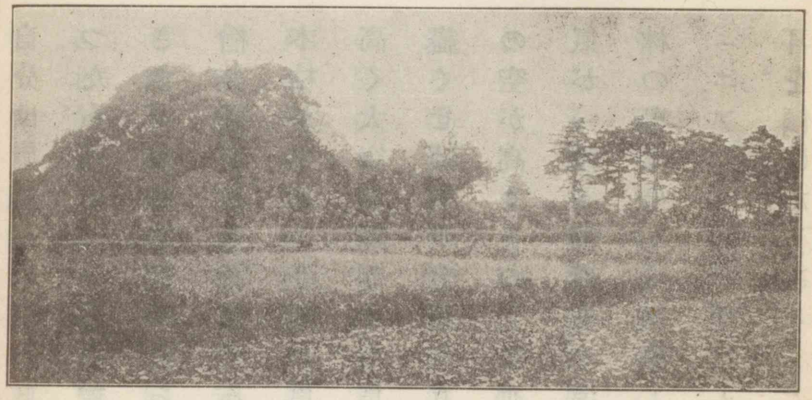
國木田獨步

昔の武藏野は萱原のはてもない光景であつたやうにいひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。その木は重に楢の類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新綠が萌えでる。その變化が秩父山以東十數里の野に一齊に行はれて、春夏秋冬を通じて、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、綠陰に、紅葉に、樣々の光景を呈する。その妙は一寸西國や、東北地方の者には解りかねる。元來、日本人はこれまで楢の類の落葉林の美をあまり知らなかつた。林といへば、重に松林のみが日本の文學・美術の上に認められて居て、歌にも楢林の奧で時雨を聽くといふやうなことは頗る稀である。

ツルゲニエフ
Turgenieff
(1818—1883)
露國の文學者

自分は屢、思つた、もし武藏野の林が楢の類でなく、松か何かであつたら、極めて平凡な、變化に乏しい、色彩の一樣なものとなつて、さまで珍重するに足らぬだらうと。

楢の類だから、黃葉する。黃葉するから、落葉する。時雨が囁く、木枯が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉が高く大空を舞うて、小鳥の群のやうに遠く飛去る。木の葉が落盡くせば、數十方里に亙る林が、一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高くその上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段と澄渡る。遠い物音が鮮かに聞える。自分は日記に「林の奧に坐して、四顧し、傾聽し、諦視し、默想す。」と書いた。ツルゲニエフが林間の晚秋を描いたものにも「坐して、四顧して、そして耳を傾けた。」とある。この耳を傾けて聽くといふことが、どんな



武藏野の林

に、秋の末から冬へかけての今の武藏野の心に適つてゐるだらう。秋ならば林の内から起る音。冬ならば林の彼方に遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風の戰ぐ、鳴る、嘯く、叫ぶ聲。叢の陰、林の奥にすだく蟲の音。空車・荷車の、林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散らす音。是は騎兵演習の斥候か、さもなくは、夫婦連で遠乘に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲。それも何時しか遠ざかつてゆく。獨

中野　今の東京市中野區淀橋區の西
澁谷　今の東京市澁谷區四谷區赤坂區の西
世田谷　今の東京市世田谷區澁谷區の西
小金井　東京府北多摩郡小金井村
いづれも元の東京市の西郊

り寂しさうに道を急ぐ女の跫音(あしおと)。遠く響く砲聲。隣の林で、だしぬけに起る銃音。

時雨の音に至つては、これほど幽寂なものはない。昔から、和歌の題にまでなつて居る。廣い野末から野末へと、林を越え森を越え、田を横ぎり、又、林を越えて、しのびやかに通り過ぎる音の、如何にも幽かで、又、鷹揚な趣があつて、優しく、懷かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は嘗て北海道の深林で時雨に遇つた事がある。人迹絶無の大森林であつたから、その趣は更に深いものがあつたが、そのかはり、武藏野の時雨の、人懷かしく囁く樣な趣はなかつた。秋の中ごろから冬の初、試に中野あたり、或は澁谷・世田谷(せたがや)、または、小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の疲をやすめて見よ。それらの物音、忽ち起り、忽ち止み、

次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉、風もなきに落ちて微かな音をたて、それも止んだ時、自然の靜肅を感じ、永遠の呼吸の身に迫るを覺えるであらう。武藏野の冬の夜更けて、星斗闌干とさえた時、星をも吹落しさうな野分が、すさまじく林を渡る音を、自分は屢、日記に書いた。風の音は人の思を遠くに誘ふ。自分は、この物凄い風の音の忽ち近く忽ち遠いのを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひ續けたこともある。

林に坐つて居て、日の光の最も美しいのを感ずるのは、春の末から夏の初で、その次は黃葉の季節である。半ば黃色に半ば綠な林の內を步いて居ると、澄渡つた大空が梢々のあひ間から覗かれ、日の光は風に動く葉末々々に碎けて、その美しさは、言盡くされぬ。日光とか、碓氷とか、天下の名所はともかく、武藏野のやうな廣い平原の林が隈もなく染まつて、日の西に傾くと共に、一面に火花を放つ有樣は、これまた武藏野の特異の美觀ではあるまいか。（國木田獨步全集―武藏野）

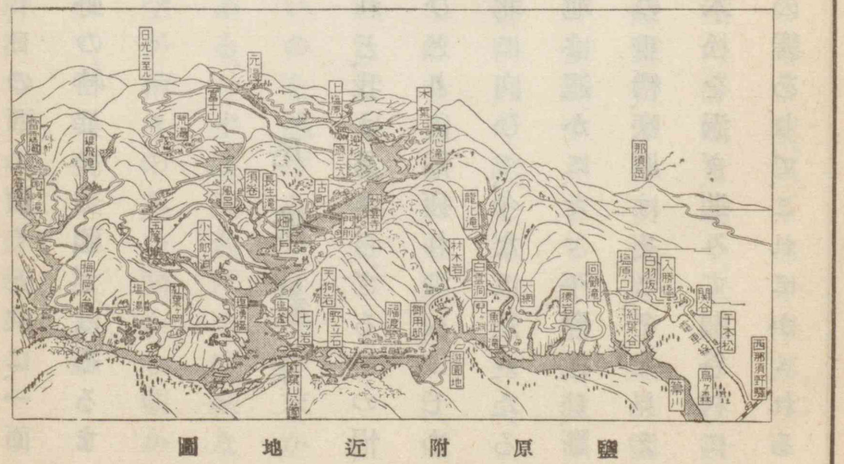
一〇　鹽原

尾崎紅葉

鹽原　栃木縣鹽谷郡鹽原溫泉
尾崎紅葉　小說家　名は德太郎　江戶生　明治三十六年歿　年三十七
西那須野驛　栃木縣那須郡太田原の西にある東北本線の停車場
那須野が原　栃木縣那須郡三島村及び太田原から磐城の國境に至るまでの大原野

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改れど、我は易からざるその悒鬱を抱きて、やるかたなき五時間のひとりに倦疲れつゝ、はじめて西那須野驛に下車せり。直に西北に向ひて、今なほ茫々たる古の那須野が原に入れば、天は濶く、地は遐かに、たゞ平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原はそこぞと見えて行くほどに、路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くるところに淙々の響ありて、これにかゝれる

を入勝橋となす。輒ち橋を渡りて僅かに行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷やかに、壑深く陥りて、いくめぐりせる九折の、後には密樹に聲々の鳥啼き、前には幽草歩々の花を開き、愈、登れば遙かに木がくれの音のみ聞えし流の水上は淺く見えて、すはやこゝに空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかとすさまじ。道の右は山を削りて長壁となし、石幽に蘚碧うして、幾條ともなく白絲を亂し懸けたる細瀑・小



鹽原附近地圖

瀑の珊々として灑げるは、嶺上の松の調も定めてこの緒よりやと見すてがたし。

車を驅りて白羽坂を踰えてより回顧橋に三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり。これより行きて、道あれば水あり、水あれば必ず瀑あり、全溪にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず橋あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯。なほ數ふれば十二勝、十六名所、七不思議、誰か一々探り得べき。

抑、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒の流に泝る片岨にして、到る處巉巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。

先づ大網の湯を過ぐれば、根本山・魚止瀧・左靫の嶮は古りて、白雲

洞は朗かに、布瀑・瀧が鼻・材木岩・五色岩・船岩なんどと眺め行けば、鳥井戸、前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。

途すがら前面の崖の處々に躑躅の殘り、山藤の懸れるが甚だ興ありと目留れば、又此の邊殊に谿淺く水澄みて大いなる古鏡の沈めるが如く、深く蔽へる岸樹は陰々として眠るに似たり。車夫を顧み、處の名を問へば、不動澤といふ。

鹽原白雲洞の遠望

遙かに望めば、行路の雲間に塞がりて、咄々何等の物かと先づ驚かさるゝ屏風巖、地を拔く何百丈と見あぐる絶頂には、ばら〱と松も危く立ちすくみ、幹竹割に割放ちたる斷面は半空より一文字に垂下して、岌々たるその勢、幾ど眺むる眼も留らず。「これこそ名にし負ふ天狗巖なれ。」と、はるかにも車夫は案內す。

足にまかせて彼の巖の頭上に聳ゆる邊に到れば谿急に激折して、水これが爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の亂れて競ふが如し。寛かに百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚は死灰の色をなして、鱗も添はず、毛も生ひざれど、狀恐しげにうづくまりて、老木の陰を負ひ、急湍の浪にひたりて、夜な〱天狗巖の魔風に誘はれて吼えもしぬべき怪しの物なり。「その昔蒲生氏鄕此の處に野立せしことあるに因りて野立石と申す。」と、例の說出す。

蒲生氏鄕　戰國時代の武將會津（百萬石）の城主織田豐臣兩氏に仕へた文祿四年（二二五五）薨年四十

率ゐたる車に乘りて急ぐ。甘湯澤・小太郎が淵など思ひやりつつ鹽釜の湯は早くも過ぎて、いつしか畑下戸の里に着きぬ。一村十二戸、溫泉は五箇所に涌きて五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは南に方りて箒川の緩くめぐれる磧に臨めり。俯せば水石の粼々たるを見、仰げば西は富士・喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落ちくる流は二十丈の絶壁に懸りて素練を垂れたる如き吉井瀑となり、東北は山又山重ねて、琅玕の玉簾ふかく、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮めらるゝなど、またあるまじき別境なり。我はこの繪を看るごとき清穩の風景にあひて、かの途上嶮しき巖と激しき流との爲に幾度か魂飛び肉消して理むる方なくかき亂されし胸のうちは譪然として頓に和らぎ、恍然としてすべて忘れたり。

まことによくこそ我は來つれ。何ぞ來ることの甚だ遲かりし。山の麗しといふも壤の堆きのみ。川ののどけしといふも水の逝くに過ぎざるのみ。牢として拔くべからざるわが半生の痼疾はいかで壤と水との醫すべきものならんと齒牙にも懸けず侮りたりしおのれこそ、まづ侮らるべき愚のものなれや。見よ〳〵木々の緑も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、そばだつ巖も、吹きくる風も、日の光も、鷄の啼く音も、空の色も皆おのづから浮世のものならで、我はこゝに憂を忘れ、悲しみを忘れ、苦しみを忘れ、勞を忘れて、身はかの雲と輕く、心はこの水と淡し。希はくは今より此の如くにしてわが生を終へんかな。（紅葉全集）

北尾鐐之助　新聞記者　寫眞家　明治十七年愛知縣名古屋生

一一　法隆寺

北尾鐐之助

和銅四年　元明天皇の御代（一三七一）

仁王　二つの金剛力士　佛法を守る勇猛の神

私はひとり中門の前に立つて、ゆつくりと五本の圓柱のふくらみから、しづ〳〵と高い樓門を見上げた。もう勾欄のあたりは夕闇に包まれて暗い。和銅四年の昔から、こゝに立つてゐるといふ阿吽の仁王像が、黄昏の沈靜の中から、物すごく私に襲ひかゝつて來る。

中門はもう閉められて、內部を窺ふことは出來なかつた。

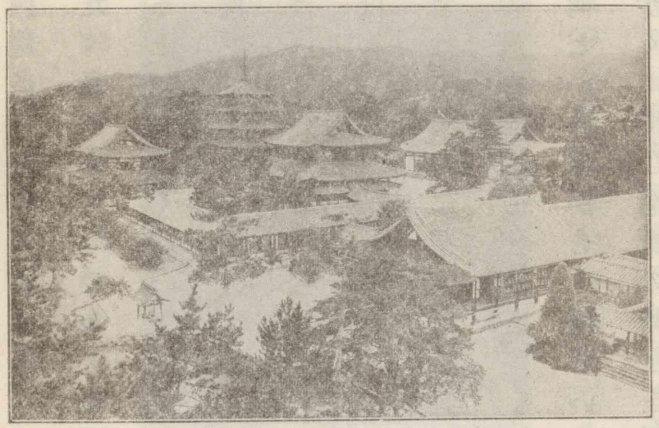
私はしづかな境內を踏んで、西

法隆寺伽藍配置圖

西院　又西寺ともいふ　金堂講堂塔等を始めとして法隆寺の主要部

東院　西院に對して夢殿舍利殿等の一部を東寺又は東院といふ

の方へ、中院前にある池のほとりを歩いて行つた。



法隆寺全景

どこからともなく、子守唄が聞える。

東から西へ、たゞ一人、境內を突切つて行く娘があつた。背には小さい子供を背負つてゐた。

讀經の聲が聞える。まるで地中から來るやうな響であつた。

鐘が鳴つた。

その音は西院の方から來るやうである。

私は、三經院の前に立つて、こゝからみると高く廻廊の上に聳え

てゐる、五重塔をしづかにふり仰いだ。

四邊には、全く人跡を絶つて、この黄昏の寺内にいきづくものは、たゞ私一人であつた。夕闇にすく／＼と立上つた塔をみてゐると、何となく頭の下るやうな氣がする。それは美しさでも、莊嚴さでも、また悠久さでもない。かういふ寂寞の境地に立つたはげしい感動の嗚咽であつた。

ぼとり……と何か地に落ちたものがある。……松笠だ。

私は、しづかに廻廊の外廊を傳つて、足音をしのばせながら、堂塔の周圍を廻り出した。

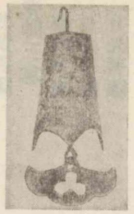
何といふ靜かさ。何といふ穩やかな夕暮だらう。

歩くに從ひ、廻廊の格子を透かして、五重塔・金堂・講堂などの建物が、夢のやうに動きつゝ隱見した。あの金堂の中にこそ、聖德太

止利　推古時代の佛師
釋迦三尊　釋迦如來　文殊菩薩　普賢菩薩
藥師三尊　藥師如來　日光菩薩　月光菩薩
白鳳　私年號

子の爲に敬造されたといふ、止利佛師の釋迦三尊像や、藥師三尊佛など、推古藝術のかず／＼、白鳳期の作である橘夫人の念持佛厨子や、推古天皇の御物であつたといふ玉蟲厨子などが、物しづかに並んでゐるのだ。寂然として閉められた石階の上の扉に、淡い夕陽が落ちてゐる。私が、あの中の佛像に對してから、もう十年になる。十年といふ月日は決して短くはないが、これらの佛像が、始めてこゝに並んだ時から考へてみると、それはまるで一瞬に過ぎない年月だ。今後幾萬年、永久に、あの佛たちは默々として、やはりこゝに並んでゐるのだらうか、………並

法隆寺金堂釋迦三尊像


風鐸

んでゐるやうな氣がする……。

そして、人間は、その時代の異なつた感情と、性能とをもつて、幾萬年の後までも絶えずこゝにたづねて來る。そして、いろ〳〵と考へながら、咳きながら、やがて死んで行く。堂も塔も、佛像も、默つていつまでも立つてゐるのだ。その力……。地軸から宇宙を貫いて、永劫に向つてふりさけてゐる姿だ。

夕陽が、やうやくうすれて、高い五重塔の龍柱に、ほのかな殘紅の影が落ちる。

かすかな、さゝやくやうな金を相搏つやうな響が一つした。おお。風鐸ではないか。

建築學者の説によると、これらの塔は、地震には絶對に安全で、若し關東大震災における、約十倍以上の震動があつても、まづ安全

だといふことが立證された。そして、それは古い日本の木造建築における、世界に誇るべき一つの謎だといふのであつた。

じつとみてゐると、塔に靈あつて動くやうな氣がする。

私はそこから、古い地藏堂の前を通つて、西圓堂の石階を、しづかに踏みしめながら、黄昏の寂寞を破らぬやうに昇つて行つた。

もうすつかり暗くなつて、そこに懸けつらねられた多くの奉納の繪馬や、不思議な額面も、さだかに分らぬほどになつてゐた。

後の藥師堂から一人の老人が出た。

「……お參詣（まゐり）かな。」

と怪しんでたづねかける。

私は、慌ててそこの鰐口を打鳴らし、手を合はせて頭を下げた。

「……はあ、こら、家内安全、息災延命……。」

私はびつくりして顔を上げた。

老人は、突然頓狂な聲を出したかとおもふと、ごほん、ごほんと咳をしながら顧みもせずに、夕闇の石階を下りて行つた。

それから私は、再び中門の外に立つた。松畷の方へ歸る南門はとくに閉められて、境內のあちこちにはもう電燈が點いた。

私は、なほ中門の前に佇み、わづかに暮殘る夕空に向つて、その樓門の上に伸上つてゐる五重塔の尖端と、金堂の大いなる屋根の反りとを再び見た。

そして私等人間の生活に、何等の關係もないところの古い堂や塔が、どうして、こんなにはげしく心を打つかといふことを考へつゞけた。

中門の前の杉の木の尖端に、夥しい雀の群が大擧して飛來するのを見た。暫くすると、あとから〳〵とその數を增して、幾千とも知れぬ群雀は、騷がしい薄暮の合唱をつゞけながら、空の一角にとき〴〵埃のごとく舞上つた。そして、實に驚くべきことには、この幾百の雀の群が、やがて、塒を求めて、あの千年の塔の屋根裏に飛びかうて行くことであつた。

塔の一角から、この小さきものを包含する、ゆたかなる慈光が、夜の空に輝くやうにおもはれる。

雀よ！　塔を汚すな。お前たちの塒にしてゐる塔こそ、世界にたゞ一つの尊いものだ。

雀は黃昏の合唱をつゞけて、中門の屋根から……塔の軒から……空の亂舞をいつまでもやめようとしない。

蒼茫として日は暮れゆく。（近畿景觀第二篇）

三浦耀　建築家　工學博士　京都帝國大學教授　昭和六年卒　年四十一
フロレンス　Florence　伊太利中部の都會
ピチ　Piti
ラファエル　Raphael (1483—1520)　伊太利の有名な畫家
レオナルド、ダ、ヴィンチ　Leonard da Vinci (1452—1519)　伊太利の有名な畫家彫刻家建築家

一二　自畫像

三浦　耀

フロレンスのピチの畫廊にある自畫像ばかりを集めた一室を私は興味を以て眺めた。一體、自畫像は肖像畫として特種のものである。それは自己の見た自己、自己批判であるからである。だからそれに依つて尙一層赤裸々にその人を表現するからである。或人が自身を如何に見るかは、他人が其の人を批判するよりも更に面白い。とりわけて伊太利復興期、藝術界の二星、ラファエル・レオナルド、ダ、ヴィンチの自畫像を比較して見るくらゐ興味深いことはない。

二人の內やつぱり一番眼立つのはラファエルの美しい姿であらう。彼の描く聖母のやうな美しさ、それを彼自身が持つて居

た。その美しさは古典的のものであるかも知れない。けれども前に立つてじつと見て居ると段々と魅惑されて行く。鮮かな色。意味深い線。そこに表された人物の氣品は、見る人を强く壓迫する。こゝでラファエルは眞直に坐つて頭を心もち傾け、上の方から何の意味もなしに見物人を——或は彼自身を——眺めて居る。そのまなざしには針ほどの興奮もない。世の中に對する好奇心もなく、自分についての興味さへも無いかの樣に見える。自分の技倆を彼はちやんと知つて居る。自分の價値もよく呑込んで居た。そして友人の口から、又世間のうはさから、自分が美丈夫である事までも、十分知つて居た。けれども、そんな事は氣にも懸けず、彼は只自身を前において、丁度靜物を描くやうに丁寧に筆を運んでいつた。かうして出來上つた

ヴァザリ　Grorgio Vasari (1512—1574)　伊太利の畫家

ミケランジェロ　Michelangelo (1475—1564)　フロレンスの彫刻家畫家詩人

のが此の品のいゝ自畫像である。

私は當時有名な批評家で、そして自分自身も立派な畫家であつたヴァザリの言葉を思ひ出す。「ミケランジェロはその藝術によつて世界を支配した。ラファエルはその藝術とさうして彼の品格によつて世界を支配した。」ラファエルは世の總べての階級の人と交際し得る才があつた。そしてさういふ人にありがちの身のまはりに涌立ついろ〳〵な羨望や嫉妬を具合よく鎭めて行つた。彼のまはりに五十人位のお弟子が、丁度殿樣に仕へるやうに好んで附纏つたが、それを彼は極めて巧に導いて行つた。當時の大僧正は彼を友人に選び、法王も亦彼を深く信賴した。「彼は人間ではない、只死すべき運命をもつた神だ。」とヴァザリは言つて居る。そして此の死すべき神の生涯は、實際三十七年であつた。一四八三年の復活祭の前の金曜日に生れ、一五二〇年の同じ金曜日に他界したのである。一般の悲痛は言ふまでもなく、法王さへ激しく泣伏したといはれて居る。生前、彼自ら選んだ墓所、羅馬のパンテオンに彼は葬られた。

パンテオン　Pantheon

彼の夭折を思ふ時、吾々はこの畫像の前に立つて一層深い感きを得ぬ。彼の貴族的な顏の蒼白さ、それは黑い髮と黑い衣服の額緣の中に浮出て見える。水平線でぐつと強く頸を區切つて居る頸飾も面白い。しかし何といつても畫の中心は彼の黑く大きく開いた眼、その視線であらう。其の眼には皮肉もない、何の表情もない、只じつと見開いて居る。又口は開いて居らぬが何かを語つて居る。心もち殆ど氣づかぬ位、前に押出された下脣には微かな倦怠の色、嫌惡の影が浮んで居る。寫眞ではよ

Bibbiena　ビッビエナ

くわからぬが、原圖ではそれが青じみた消えかゝつた脣の色によく出て居る。彼にはもう大きな希望はなかつた。自分の願望は殆ど總べて達せられ、今や彼は絕頂に立つて居る。さてそれから？彼は將來、いかに努力しても過去の樣に大げさに報いられる餘地はなかつた。それが彼の心を重くした。美にも、奢侈にも、彼はもう倦き〳〵してしまつた。彼は、いづれ嫌惡倦怠の谷間に下つて行く、その峠に立つて居たのである。前途はもう行きづまつてしまつた。だから彼は、當時有名だつた友人大僧正ビッビエナの姪との結婚話も、法王から話のあつた大僧正の位置の事を考へて潔く斷つてしまつた。私はそれらの心持をこの畫がよく物語つて居ると思ふ。

ラファエルの像に早熟な怜悧さをくみ取つた吾々は、こゝに、世の中の善惡すべてに對して燃えるやうな研究的氣力と緊張とをもつた偉人の姿を見る。その極めて意志的、積極的な眼光は炯々として胸底に徹する。自分自身すら信ぜぬ程の姿である。彼の畫は誠に自己審判だ。ラファエルの明るさ鮮かさに較べて、これは神祕的で何處かに祕密を包んで居る。それはやがて彼の人となりの象徴と見るべきものだらう。畫の手法にまでもそれがよく表れて居る。ラファエルの鮮明な頭髮に對して、レオナルドのこの頤髯は黑い衣服地へぼんやりと消えて行く。そこに大きな相違がある。前者のは線、これは光と影とでもいはうか。彼の顏は背景の暗黑の中から、極めて入念に描かれた絹のやうな髯の中からぼうつと浮出して居る。斜にかぶつた

ビロード Veludo

帽子なども、こゝでは只この顔の背景となつて居る。ビロードの其の帽子の影は彼の額を深くゑぐつて顔の半面を暗く消して居る。レオナルドは美しい肉體の持主で、そして又大力であつた。それは此の畫像からも想像が出來る。彼は片手で蹄鐵を丁度鉛であるかのやうに曲げてしまふことが出來たとヴァザリは書いて居る。彼の緊張した、鋭い眼光は、不安、苦悶、そして罪惡をさへ思はしめる。實際自分自身に對する不滿・不信が彼の顔をしかめさせた。彼の額の強い皺、引寄せた太い眉、鼻筋の鋭い隆起などは實に胸裡の苦惱を表示して餘りある。眼は恐しく且神祕的に光つて居るけれども、それ以外はすべて極めて柔かく描き出されて、そこに強い對照を形づくつて居る。殊に口は寧ろ女のやうに優しく、精緻に描かれて居る。

この畫をかくの如く神祕的に恐しく見せるのは、それは先づ彼の眼の表情であらう。「自分は善人でない、誤つてはいけない。」彼は言ひかねない。しかしかやうな考は古い時代の科學者には通有性であつたことを吾々は忘れてはならない。昔は知つてゐるものは「惡」であつた。そして魔法使或は惡魔を以て目された。彼自身は元來柔かな平和な人間であつたが、理智がそれを鋭くしてしまつた。彼に於ては平和な素質と學究的な熱心と兩方備つて居たのである。理智の力の强さはこの眼底に集くつて居る。そこには又知識慾が燃上つて居る。繪畫・音樂・詩・天文學・工學・解剖學、次から次へと彼はかかりあさつた。この多方面の知識慾、これこそ彼が作品を後世に餘り殘さなかつた原因であらう。それが又、やがて彼がミケランジェロやラファエル

西行法師
歌僧
俗名佐藤義清
建久元年(一一九〇)寂
年七十三

とは別の意味で傑出した點である。から考へながら、吾々は今の世の心で再びこの神祕な畫像を凝視すると、その惡人の相ある顏も綺麗に了解することが出來る樣に思ふ。(建築風景)

一三　鳴立つ澤

西行法師

鶯はわれをすもりにたのみてや谷のほかへはいでてゆくらむ

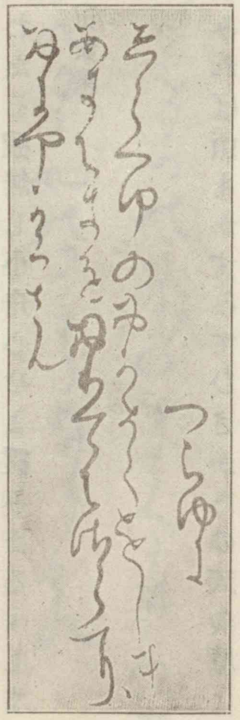
吉野山こずゑの花を見し日より心は身にもそはずなりにき

花も散り人の來ざらむをりはまた山のかひにて長閑なるべし

筆蹟
つらゆき
しらつゆのおかまく
をしきあきはぎをを
りてはさらにおきや
かくさん

眞菅生ふる山田に水をまかすればうれしがほにもなく蛙かな

五月雨のはれぬ日數のふるまゝに沼の眞菰は水がくれにけり



傳西行筆
(白川切)

山里のそとものをかの高き木にそゞろがましき秋の蟬かな

月ならでさし入るかげもなきまゝに暮るゝうれしき秋の山里

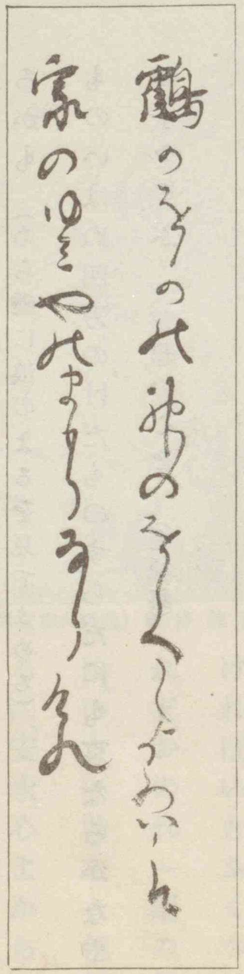
源實朝　源家三代將軍　承久元年（一八七九）薨　年三十八

心なき身にもあはれは知られけり鴫たつ澤の秋のゆふぐれ
つくづくともものを思ふにうちそへてをりあはれなる鐘のおとかな
迫門わたる棚無し小舟心せよ霰みだるゝしまきよこぎる（山家集）

源實朝

今朝みれば山もかすみてひさかたの天の原より春は來にけり（正月一日よめる）
ほとゝぎすきけどもあかず橘の花ちる里のさみだれのころ
吹く風は涼しくもあるかおのづから山の蟬なきて秋は來にけり
もののふの矢なみつくろふこての上に霰たばしる那須の篠原
世の中はつねにもがもな渚こぐ海士の小舟の綱手かなしも
箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に浪のよるみゆ
わたつみの中に向ひていづる湯のいづのお山とうべも

筆蹟　鶴がをかの神のをしへしよろひこそ家のゆみやのまもりなりけれ


源實朝筆

走湯山　今の靜岡縣伊豆國田方郡熱海町伊豆山神社
太上天皇　後鳥羽法皇
富士谷御杖　江戸時代の歌學者名は成壽又は成元京都に住す文政六年(二四八三)歿年五十六
大雅堂　江戸時代の文人畫家池野無名九霞山樵京都の人祇園南海柳澤淇園等に學ぶ安永五年(二四三六)歿年五十四
安永檢校　京都の人

いひけり（走湯山參詣の時）

山はさけ海はあせなむ世なりともきみにふた心我があらめやも（太上天皇御書下預時歌）

大海の磯もとゞろによする波われてくだけてさけてちるかも（あら磯に浪のよるを見てよめる）

ものいはぬ四方のけだものすらだにも哀なるかなや親の子を思ふ（慈悲の心を）（金槐集）

一四　ものの上手　富士谷御杖

大雅堂といひし人、近頃書畫をもて鳴れり。若かりし時、三絃を好めるあまり、その頃の妙手なりし安永檢校といふ瞽者の近隣にわざと卜居して、日々に人々に教ふるを聞きて、心をやられき。

筆蹟　遠ク寒山ニ上レバ石徑斜ナリ。白雲生ズル處人家有リ。車ヲ停メテ坐ロニ愛ス楓林ノ晩。霜葉ハ二月ノ花ヨリモ紅ナリ。　九霞山樵寫

或時、安永が家にいたりて、かく殊更に近隣に卜居したるよしを告げて、一曲を望む。安永その志のねもごろなるを感じて、やがて傍にありし三絃をさぐりとりて、彈きて聞かせき。しかるにその三絃裏皮破れたりければ、いとふくつけゝれど、おのれ一期の思出に、いま一曲をと乞ひけるに、安永、心よからぬ面持して「そこは何を業とし給ふぞ」と問ふ。大雅答へて「繪をかき侍る」といふ。安永のいへらく、「さは、そこは繪はいと拙かるべし」といふに、大雅思へらく「一道に達しぬれば、よろづのいたりも深きならひなれど、これ

楓林停車（池野大雅堂筆）

は瞽者なるを、いかでか繪事は知るべき」と、なまかたはらいたけれど「いかなればおのれ繪の拙きを知り給ふぞ」といふに、安永笑ひて「いま裏皮破れたる三絃にてひきたるを飽かずおぼすその聽きざまにて繪の拙さはしるきなり。すべて三絃は、右に撥をもてれば、右手にてひくこと言ふも更なれど、左手に精神なくては、妙處には到るべからず。いまわが左手の精神、そこの耳に入らぬをもて推すに、繪事もまた筆は右手に持ちて描く、いふもさらなれど、おそらくは左手に精神あらじと思ふが故なり」といひき。大雅いといたく感服懺悔して、深く恩を謝して歸りて後、繪に深く心や入りたりけん、遂に世に鳴るばかり一家を興されたりき。「これひとへに、安永檢校が恩にて、やがてわが繪の師なり」と常に自ら言はれきとぞ。

芥川龍之介　文學者　東京生　昭和二年歿　年三十六

崋山　渡邊登　憂國者　畫家　三河國田原藩士　天保十二年(二五〇一)自殺　年四十九

馬琴　瀧澤解　小說家　通稱は淸左衞門　曲亭馬琴と號す　嘉永元年(二五〇八)歿　年八十一

はかなきわざといへども、いたりを究めたるきはは、人の耳目の及ばぬ所にすら精神は充ちたり。此の物語、もはらわが御國ぶりの要を得たり。ものいはんにも、うちふるまはんにも、文書かんにも、歌詠まんにも、たゞ耳目の及びをのみ限りと心得なば、かの安永檢校に笑はれんかし。（北邊隨筆）

一五　戲作三昧

芥川龍之介

崋山が歸つた後で、馬琴はまだ殘つてゐる興奮の力に、八犬傳の稿を續けるべく平生のやうに机へ向つた。先を書續ける前に昨日書いた所を一通り讀返すのが彼の昔からの習慣である。そこで、今日も彼は、細い行の間へべた一面に朱を入れた何枚かの原稿を、氣を附けてゆつくり讀返した。

すると、何故か書いてあることが自分の心持とぴつたりしない。字と字との間に不純な雜音が潛んでゐて、それが到る處で全體の調和を破つてゐる。彼は最初それを彼の癇が亢ぶつてゐるからだと解釋した。

「今の俺の心持が惡いのだ。書いてあることは、どうにか書切れる所まで書切つてゐる筈だから。」

さう思つて彼はもう一度讀返したが、調子の狂つてゐることは前と一向變りがない。彼は老人とは思はれないほど心の中で狼狽し出した。

「このもう一つ前はどうだらう。」

彼は其の前に書いた所へ眼を通した。すると、これも亦徒に粗雜な文句ばかりが雜然として散らかつてゐる。彼は更に其の

前を讀んだ。さうしてその前の前を讀んだ。

しかし讀むに從つて拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して來る。そこには何等の映像をも與へない敍景があつた。何等の感激をも含まない詠嘆があつた。さうして又

八犬傳第八輯見返
（瀧澤馬琴筆）

何等の理路をも辿らない論辯があつた。彼が數日を費して書上げた何回分かの原稿は今の彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は急に心を刺されるやうな苦痛を感じた。

「これは初から書直すより外はない。」

彼は心の中でかう叫びながら、忌々しさうに原稿を向ふへ突き

弓張月
　鎭西八郎爲朝の一生を敍した小說
　三十卷
南柯夢
　人情小說
　十四卷
八犬傳
　里見の臣八犬士の忠勇によりて主家を安房上總に再興する由を仕組んだ歷史小說
　一部百六卷
　二十八年を費して成る
端溪
　支那廣東省廣州府の東にある溪
　古く名硯を產した

やると、片肘ついて、ころりと横になつたが、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼は此の机の上で「弓張月」を書き、「南柯夢」を書き、さうして今は「八犬傳」を書いた。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎭、蟇の形をした銅の水差、獅子と牡丹を浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、さういふ一切の文房具は、皆久しい以前から彼の創作の苦しみに親しんでゐる。それらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな、彼自身の實力が根本的に怪しいやうな忌まはしい不安を禁ずることが出來ない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると人並に已惚の一つだつたかも知れない。」

遼東の豕
　遼東ニ豕有リ、白頭ノ子ヲ生ム。異トシテ之ヲ獻ズ。行イテ河東ニ至ル。群豕皆白キヲ見テ慙ヲ懷イテ還ル。
　（後漢書）

かういふ不安は、彼の上に何よりも堪へ難い落莫たる孤獨の情を齎した。

彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には常に謙遜であることを忘れるものでない。が、それだけに、又同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると共に飽くまでも不遜である。その彼が結局自分も彼等と同じ能力の所有者だつたといふことを、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふことを、どうして易易と認められよう。而も彼の強大な「我」は「悟り」と「諦め」とに避難するには餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難破船の船長のやうな眼で、失敗した原稿を眺めながら静かに絶望の威力と戰ひ續けた。若し此の時、彼の後の襖がけたゝましく開け

放されなかつたら、さうして「お祖父樣只今。」といふ聲と共に、柔かい小さな手が彼の頸へ抱附かなかつたら、彼は恐らく此の憂鬱な氣分の中に何時までも鎖されてゐたことであらうが、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供だけが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よく飛上つた。

「お祖父樣只今。」

「おゝよく早く歸つて來たな。」

この語と共に「八犬傳」の著者の皺だらけな顏には、別人のやうな喜が輝いた。

茶の間の方では、癇高い妻のお百の聲や、內氣らしい嫁のお路の聲が、賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から悴の宗伯も歸り合はせたらしい。太郎は祖父の膝に跨がり

栗梅　少し濃い栗色。

ながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞面目な顏をして天井を眺めた。外氣にさらされた頰が赤くなつて、小さな鼻のまはりが息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父樣にね。」

栗梅の小さな紋付を着た太郎は、突然かう言出した。考へようとする努力と笑ひたいのを怺へようとする努力とで、靨が何度も消えたり出來たりする。それが馬琴には自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日？」

「御勉强なさい。」

馬琴は到頭噴き出した。しかし、笑の中ですぐ又語を繼ぎなが

絲鬢奴 頂を廣く剃り左右の鬢の毛だけを結んだ奴

ら、

「それから？」

「それから、えゝと癇癪を起しちやいけませんつて。」

「おや〳〵それきりかい。」

「まだあるの。」

太郎はかう言つて、絲鬢奴の頭を仰向けながら、自分も亦笑ひ出した。眼を細くして白い齒を出して、小さな靨を寄せて笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて世間の人間のやうな憐むべき顔にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の意識に溺れながら、こんなことを考へた。さうして、それが更に又彼の心を擽つた。

「まだ何かあるかい？」

「まだね、いろんなことがあるの。」

「どんなことが？」

「えゝとお祖父樣はね、今にもつと偉くなりますからね。」

「偉くなりますから？」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつと、もつと、ようく辛抱なさいつて。」

「誰がそんなことを言つたのだい。」

「それはね。」

太郎は惡戯さうに、ちよいと彼の顔を見た、さうして笑つた。

「だあれだ？」

「さうさな、今日は御佛參に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げながら、顋を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「淺草の觀音樣がさういつたの。」

かういふと共に、この子供は家內中に聞えさうな聲で嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛退いた。さうして、うまく祖父をかついだ面白さに、小さな手をたゝきながら轉げるやうにして、茶の間の方へ逃げて行

刹那 Ksana 梵語 極少時間

隱士松翁 吉野時代の人 傳未詳

つた。

馬琴の心中に嚴肅な何物かが刹那に閃いたのは此の時である。彼の脣には幸福な微笑が浮んだ。それと共に、彼の眼には何時か涙が一杯になつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふ所でない。この時この孫の口からかういふ語を聞いたのが不思議なのである。

「觀音樣がさういつたか。勉强しろ、癇癪を起すな、さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歲かの老藝術家は涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。（芥川龍之介全集――戲作三昧）

一六 ひろなりの皇子（みこ）

隱士松翁

ひろなりの皇子
後村上天皇の第二皇子煕成親王
後の後龜山天皇
一説には第一皇子寛成親王
後の長慶天皇

菜摘川
奈良縣大和國吉野郡國樔村大字菜摘地方を流れてゐる吉野川の名

實爲
藤原氏
後村上天皇に仕へて大納言內大臣となる

忠行
民部大輔
傳未詳

ひろなりの皇子のいまだ幼うおはしましける時に、若き殿上人數多伴なはせ給ひて、菜摘の河淀のほとりにて、鷹使はせて御覽ありけるに、傍にいと大きなる岩のえもいはずおもしろきに小松の生ひいでたるありけり。皇子御覽ぜさせて「この岩を歸りなん時、皇居の御庭にもて參れ、うへに奉らん。」と實爲中將にのたまはせければ、幼き御心を推しはかりて、御事うけせさせ給ふ。鳥など數多取らせ給ひて歸らせ給へる時に、忠行侍從に「岩を忘れ給ひし。」とのたまはせければ、「民部大輔が力も強く侍れば御あとよりもて參り候なり。」と啓して皇居に入らせ給ふ。御鷹の鳥など奉らせ給ひて、實爲中將に「ありつる岩を。」と召させ給ひけるに、「忠行の侍從の、仰言を承りぬ。」と啓し給へば、侍從を召して「如何に。」と尋ねさせけるに、「民部大輔の御後よりもて參らんといひつる。民部を召させ給ひなん。」とのたまはせて、むづからせ給ひて、「中將にこそよく言ひつれ。などさは言ふにか。」と委れさせ給ひければ、中將のありつることを啓し給へば、をかしがらせ給ひて、「誠に面白からん岩こそ見まくほしけれ。」とのたまはするに、中將立ち給ひて、民部大輔に「かゝる事なんある。如何してん。」とのたまへば、「すべきことこそあれ。」とて、御庭にありける小さき岩に、松の枝を取附けて、中將といと重げに持ちて、宮の御前に据ゑ奉れば「小さくこそあれ、それにはあらじ。」となほむづからせ給ひければ、民部大輔「さればこそ、その岩を持ちて上の山を通り候ひしに、右左より山のさし出でて、道のいと狹き處にてかなひがたく、いかにせましとたゞよひ侍りしに、向ひの方より山伏の來たりけるが、『岩

にせかれて通られぬにこそ。のけ給へ。』とのゝしりけるほどに『我もせんかたなさに、かくて侍る。如何にせまし。』とわびあへるに『さらばすべきことこそあれ。』とて、數珠をおしもみ、何やらんつぶやきて祈るに隨ひてこの岩小さくなりて、やす／＼通りて候ひしほどに、山伏も行過ぎしを呼びかへして、『もとの如くに祈りなほしてん。』といひければ、『また行く先に細き道のいますれば、いかゞし給はん。』といひしほどに、げにもと思ひ侍りて、そのまゝ持て參りぬ。』と言ひ給へば、上より始めてありつる人々、をかしがらせ給ふに、宮の御氣色もいとよくならせ給ひて、「げにさもあらんことなり。その山伏を召しかへせかし。」とのたまはするに、「はや遙かに行過ぎて、いづち行くらんも知らず。」と啓し給へば、「ほいなきことにこそあれ。とゞめて民部大輔の大きなる空言を少し

六條河原　京都の鴨川の河原で六條通に當る處

きやうに祈らせんものを。」とのたまはせける。誠に行末たのもしき御ことにこそいとせめて覺え侍りしか。（吉野拾遺）

一七　楠木正行の母

湊川にて討たれし楠木判官が首をば、六條河原に懸けられたり。「去んぬる春も、あらぬ首を懸けたりしかば、これもまたさこそあらめ。」といふ者多かりけり。

　　うたがひは人によりてぞ殘りけるまさしげなるは楠木
　　　が首

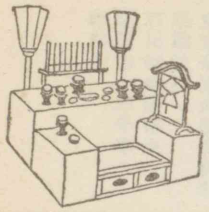
と狂歌を札に書いてぞ立てたりける。其の後尊氏卿楠木が首を召されて「朝家、私日、久しく相馴れし舊好の程も不便なり、後の妻子ども今一度空しき貌（かたち）をもさこそ見たく思ふらめ。」とて、遺跡

へ送られける情の程こそ有難けれ。

楠木が後室、子息正行これを見て、「判官今度兵庫へ立ちし時、樣々申し置きし事ども多かる上、今度の合戰に必ず討死すべしとて、正行を留め置きしかば、出でしを限の別なりとは豫てより思ひ儲けたる事なれども、貌を見ればそれながら、目塞り色變じて變りはてたる首を見るに、悲しみの心胸に滿ちて、歎の泪せきあへず。今年十一歳になりける帶刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有樣、母が歎のせん方もなげなる樣を見て、流るゝ泪を袖に抑へて、持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて、卽ち妻戸の方より行きて見れば、父が兵庫へ向ふ時、形見に留めし菊水の刀を右の手に拔き持つて、袷の腰を押下げて、自害をせんとぞし居たりける。母急ぎ走り寄つて正行が小腕に取りついて泪を流して申しけるは、『栴檀は二葉より芳し。』といへり。汝幼くとも父が子ならば、是程の理に迷ふべしや。をさな心にもよく〳〵事の樣を思うて見よかし。故判官が兵庫へ向はれし時、汝を櫻井の宿より還し留めし事は、全く跡を弔はん爲にあらず、腹を切れとて殘し置きしにもあらず。『我たとひ運命盡きて戰場に命を失ふとも、君いづくにも御座ありと承らば、死殘りたらん一族・若黨共をも扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅して、君を御代にも立てまゐらせよ。』と言置きし所なり。其の遺言具に聞きて我にも語りし者が、何時の程に忘れけるぞや。かくては父が名を失ひはて、君の御用に合ひまゐらせん事あるべしとも覺えず。」と泣く泣く諫め止めて、拔いたる刀を奪ひ取れば、正行腹を切得ず、禮盤(らいばん)の上より泣倒れ、母と共にぞ歎きける。

櫻井　今の大阪府攝津國三島郡島本村櫻井山崎驛の西南三粁

禮盤　佛前正面の高座勤式の時導師この上にのぼりて佛を禮拜する



室生犀星　詩人　小說家　名は照道　明治二十二年金澤市生

其の後よりは、正行父の遺言、母の教訓、心に染み肝に銘じつゝ、或時は童どもを打倒し、頭をとる眞似をして、「これは朝敵の頸をとるなり。」と云ひ、或時は竹馬に鞭を當てて、「これは將軍を追懸け奉る。」なんどいひて、はかなき手ずさみに至るまでも、只此の事をのみ業とせる心の中こそ恐しけれ。（太平記）

一八　冬の感情

室生犀星

洲に雪がつもつた、
枯蘆が折れこんで埋れてゐる。
水たまりはまんまるい象になり、
沈んだ雪で曇り、
流れてゐる水は暗い色を引いてゐる。
土手の枯木も
田圃の果ても雪につゞいてゐるばかり……
わたしは何も見ない、
たゞこれだけをマントのすき間から見たばかりだ。
折れこんでゐる蘆は氷りついて
もう既にくされてゐた……（故郷圖繪集）

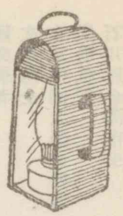
マント　Manteau　フランス語　大風呂敷のやうな外套

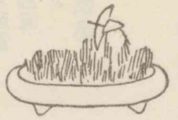
藤岡作太郎　國文學者　文學博士　東京帝國大學文科大學助教授　石川縣金澤市生　明治四十三年卒　年四十一

一九　自然の愛

藤岡作太郎

慈愛なる母の懐に養はれたる子は生涯その恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして、河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美溫雅なる山川は常に瞼上に愛を湛ふるが如し。接する者はこれに親しみ、親しむ


カンテラ


稗蒔

忍草

者はこれを慕ふ。愛に迎へらるゝ者は愛を酬いざるを得ず。

天然の大公園に棲む我が國民がその一木一草を懷かしむは自然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には食品・玩具などの多かる中に、露を帶びたる植木の葉の翠、花の紅こそカンテラの光に映えてみづ〳〵しく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買求めて座敷に飾り、庭に植込む。裏長屋の道具の据所もなき窓前にも稗蒔作りて田舍の景色の面影を偲び、破れ鉢に唐芋を育ててやさしき野趣を嬉しむ。長火鉢の脇の福壽草は鏡餅に對して暖げに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて自然を愛好することかくの如きは、他の國民にその匹ありや。

我が國民は母の慈愛をのみ受けて父の威嚴を知らず。自然の

恐しき猪も　和歌こそなほをかしきものなれあやしのしづ山がつのしわざもいひいづれば面白くおそろしきゐのししもふすゐの床といへばやさしくなりぬ（徒然草）

兼好　鎌倉時代の文學者吉田氏正平五年（二〇一〇）寂年六十九

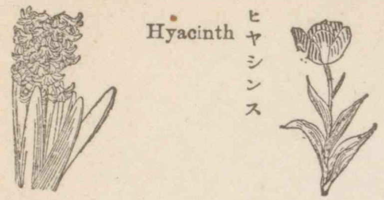
藤袴

愛すべきを見て、畏るべきを思はず。野をも垣をも吹亂す二百十日の風も、野分の名にやさしく、峯も谷も一つに埋みてすさまじき冬の山里も、深雪といへばみやびやかなり。「恐しき猪もふすゐの床と稱ふるにやさしく聞ゆ。」など兼好がいへるは、我等が自然に對する此の傾向を說明せるなり。雨といへば照りつゞきたる夏などは嬉しけれど、一日の降も十日の照より飽き〳〵するに、卯の花くたし・時雨など、何れも趣ありて感ぜらる。自然の愛はかくして表るゝのみならず、その名を借りて屢、人事に用ふ。文學には源氏物語の巻の名に夕顏・末摘花・葵・榊・朝顏・胡蝶・螢・常夏・藤袴・若菜・柏木・鈴蟲・紅梅等あり。菓子に鶯餅・櫻餅・柏餅・萩の餅・紅梅燒・時雨など枚擧するに遑あらず。今の刻煙草の名にも福壽草・白梅・皐月・あやめ・萩・紅葉等あり。古く獸肉を紅葉と

いひ、金貨を山吹に譬へたるもやさしからずや。

我が國民は自然を愛賞する餘り、又よくこれを尊重せり。尊重するものには悅んで服從す。彼等はみだりに人工の手を加へずして、自然のまゝに自然を仰ぐ。此の服從を以て屈伏といふなかれ。悅服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは不平なる奴隷が氣儘なる主人に對するが如く、悅服するものは從順なる兒孫が寛大なる家長を見るが如し。任意的なるものは毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで已の意とす。

花に對する我等の趣味が如何に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿は美はしきにあらず、花一輪の色の艷に、香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するより、峯に亙り川に沿ひて、


チューリップ Tulip
ヒヤシンス Hyacinth

雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もその儘に、願はくはこれに置く朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて歡を助くるに、一は床上の盆石・盆栽に自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るも、彼は物を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋の草花のチューリップ・ヒヤシンスなど、その葉に何の趣もなくして、その花の妖艷なるは、寧ろ我等の眼に毒毒しと感ぜらる。秋の野の女郎花尾花、その花に何の美しきことかある。されど、有るか無きかの黄花を捧げてなほたよ〱と下蔭の蟲の音にも搖ぐ樣、ますほの色はやがて白くほゝけて

露に濡れ風に靡く趣は、我が胸にしみて忘れられず。日本人が花を愛するはその外形に非ず、賦色に非ずして、その風情にあり、直に自然の懷にわけ入りてその眞實を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尙ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ日本國民の特性なり。（國文學史講話）

大町桂月　文章家　國文學者　名は芳衞　大正十四年歿　年五十七

花園神社　今の東京市四谷區新宿北裏町にある

二〇　田園雜興

大町桂月

みづから世を避けて門を鎖すにはあらねど、片田舍に住めば來り訪ふ者おのづから稀なり。東京の西郊、花園神社の傍、市街をはなれて一宇の茅屋立てり。屋外凡そ千坪、前に葡萄棚あり、後に竹林あり。梅や櫻や柿や栗や松や檜や椿や楓や無花果や百日紅や、其の間に簇生す。四顧たゞ木立を見て人家を見ず。環堵蕭然、何となく我が心に適する處なり。

われ年來病軀を抱けり。我が志を伸ばさんには、まづ我が體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街上の塵埃到らず。啻に我が心に適するのみならず、亦我が體に適す。一汽車の便をかりて都門より歸り來れば、滿園の綠樹笑つて我を迎ふ。穉兒飛來りて我が手の風呂敷包に縋る。例として土產の菓子あらんを期するなり。さるにても、わが志業未だ緒に就かざるに、早くも三人の子の父となりぬるこそ恥づかしけれ。」

蒸暑き夏の夕、凉臺を無花果樹下に移して、一家晚餐に團欒すれば、竹葉そよぎて凉氣自ら盤上に迸る。一鉢の飯、母と分ち、妻子と分ち、庭の雞と分ち、池の鯉と分つ。今一つ、一匹の犬いつも食時を違へず來りてかしこまる。これ近隣の家の飼へるものな

り。その主人、近頃妻子を殘して病死せり。喪家の狗のたとへ、思ひ出されて、あはれなるまゝに、殘肴を投與ふるを常とすれど、貧家の厨、魚なきこと多し。馬鈴薯など與ふるに、たゞ鼻先に嗅ぎたるのみにて、悄然として立去るこそ氣の毒なれ。

一泓の池水、二間四方に足らざるばかりなれど、清水涌きて流れて田にそゝぐ。もとは、朽木中に滿ちて、蛙や蠑螈の棲處となり、岸には雜草生茂りて見るかげも無かりしが、草を芟り、朽木を取除け、蠑螈を捕へ出すこと七八十に及び、始めて澄みて鑑むべくなりぬ。池邊に立ちて眺むるに、蛙・蠑螈のみと思ひの外、長さ一尺ばかりの黒鯉ありて游ぎめぐり、人の足音聞きては、穴深くひそみ行く。大兒と中兒と之を見て興がり、今少し鯉を入れよといふまゝに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の

多きに及べり。白や緋や黒や碧水に一種の模樣を描き、或は集り或は散じ、時には水面に噞喁し、時には空に躍る。かたばかりの欄干ある獨木橋上に立ちてこれを眺め、これに餌を與ふること、三兒にとりてはこの上もなき慰なり。

おぼつかなげに、とゝゝゝと呼びて雞に餌を與ふることも、亦小兒が慰の一つなり。家の四方に散在せる雞、この聲を聞きて喜んで來り集り、先を爭うて食ふ。雄三羽雌七羽ばかりあり。種類も一ならず。就中しやもの雌一羽、最も慓悍なり。餌を貪ること甚だしく、近よるものの頭を嘴にてつゝくさま、如何にも憎し。他の雞恐れて敢へて近よらず。されど最も大いにして好き卵を生むは、このしやもなり。

われ平生物累なきことを希ふ。一室の中、粗末なる机と書物と

清正の猿　加藤清正が天地丸に乘つて肥後國へ歸る時船中で論語を讀み朱で處々へしるしをつけてゐた或時厠へいくとその留守に清正の飼つてゐた猿が朱筆を執つてめちやくちやに塗りたくつた清正歸つて來てこれを見つけて笑つていつた「お前も聖人の道に志すか」

の外には、また他物なし。興來りて筆を執り、書を繙き、興盡きて則ち臥す。雛遠慮なく座に上り來り、机上に立ちて啼くことあり。ゴム履はきて庭に遊べる小兒、いつの間にか、履のまゝにて座に上り來ることもあり。されど雛上らば追ふべきものと心得て、おのれは履にて上り居ながら、兩手をひろげて雛を追出すもいとあどけなし。末子は未だ口もきけぬ程の年頃なり。母の乳に飽けば、をり〳〵我が机邊に來る。われ坐すれば兒も坐し、われ横になれば兒も横になり、われ書を開けば兒も書を開き、われ筆を執れば兒も筆を執る。所謂家庭の感化は自らかゝる中にあるべしと思はる。あまりおとなしきに、ふと心づきて見れば、折角我が書きたる原稿を塗抹せることなどあり。かはいや、幼兒、清正の猿と相去ること遠からず。

親を思ふ　親を思ふ心にまさる親心今日のおとづれいかに聞くらん　（吉田松陰）

廉頗　支那の戰國時代の趙の武將

園中兒を喜ばしむるものは、梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、無花果なり、筍なり、雛なり、鯉なり、蟬なり、蜻蛉なり。此等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見れば只うれしきなり。慾もなし、得もなし、名利の念も無し。沈思して自然に對すれば、始は其の愛すべきを覺え、終には其の敬すべきを覺ゆ。

かゝるたのしき我が團欒にも、なほ一點の愁雲たなびく。そは我が胃腸の病なり。母や齡古稀に近し。常に我が病身なるを氣遣ひ、わが食少きを憂ふ。「親を思ふ心にまさる親心。」と詠じけん。世に子の病ばかり親の心を傷ましむるものなし。罪深きかな。我もまた不幸の子なるかな。昔は廉頗老いてなほ用ひられんとして、强ひて健啖せりとかや。それは功名故、われは親故に、强ひて餐を加へ、久しく絕ち居りし晝食さへ物するに至り

羽仁もと子　教育者　明治六年青森縣生

ナザレ　Nazareth　パレスチナのガリレヤの一村

ぬ。食進むやうになりて、嬉しとて母の喜ぶ樣見るにつけても覺えず涙ぐまれしこと幾度ぞや。（桂月全集—春草秋草）

二一　をさなご

羽仁もと子

かはいゝをさなご、幼兒は今も昔も世界に充滿してゐるけれど、さうして愛らしい意味でも、手のかゝる意味でも、私たちの注意をその身のまはりにひきつけずには置かない彼等だけれど、幼兒といふものを本當に知つた人は、昔から幾人ゐたでせう。さうして誰でも幼兒をかはいがるけれど、本當の意味でかはいがる人は事實澤山ゐないやうに思はれる。大人も子供もそれだからかはいさうである。

「汝ら幼兒の如くならざれば天國に入る能はず。」といつて、ナザレ

イエス　Jesus　（前4—30）　耶蘇

のイエスは私たちに幼兒を知れと仰つた。なるほど子供には罪がない、あんなにならなくてはといふのだと單純にさう思ふ人は、已に幼兒を知らないのだと思ひます。なぜなら幼兒にも親譲りの罪が十分あるからです。唯彼等はそれを知らないのです。知らなくても罪があれば、そのある罪が働いて、またその上に新しい罪をつくり出して行きます。この大切なことをまづ知らないで、どうして幼兒がわかりませう。この重大な事實を輕く見て、どうして幼兒に本當に深い同情を持つこ

幼兒

とが出來ませう。本當の同情なくして、どうして本當に彼等を愛することが出來ませう。

幼兒はまた我等の喜であります。それは誰でも知つてゐます。それゆゑに私たちは、彼等にひきつけられて、さうして彼等を愛します。しかし多くの人々は、彼等の何故に我等の喜であるのかを深く思つて見るのでせうか。今の私たちの幼兒たちは、大昔の幼兒と生れた時から已にちがつてゐるでせう。年とつた助産婦さへもさういひます。今の赤坊はその人たちのはじめに見た多くの赤坊よりも、何かにつけて進んでゐることを述懷します。これは前の親讓りの罪とは反對な親ゆづりのよい能力です。生れた時ばかりではありません。それからの人と成る發達の道程も、我々の先祖が曾て甚だ困難とした場合、及び非常に多くの歲月を費して成就したことを、より僅かの困難と、より短い月日の間に出來るやうになつて來ました。よし唯一二代の親と子の間においても明らかにそれを經驗することが出來ないにしても、人類の一番新しい進歩の結果を、かくして我等の幼兒の上に見ることが出來る譯です。それが生物としての我我の深い本能的の喜であるに違ひないのです。

私どもはこのやうにして、我々の幼兒を喜として眺め得るばかりでなく、他の一面において、自分たちの已に經驗し努力して來た道程を、私たちの幼兒もその通りに、段々見ることが出來、聞くことが出來、匐ふことが出來、話すことが出來てゆくのは、さうあることを知つて待つてゐる私たちに、また實に嬉しいことです。無上の愛らしい形態の中に祕されてゐる、この人類全體の過去

の努力と永遠にわたる望を、私たちは知らず識らず我等の幼兒として愛で喜んでゐるのだと思はれます。

桃色の頬をした無心な幼兒が愛らしい、腹を痛めた子だからかはいゝ、己の子だからかはいゝ、といふだけの氣持では、決して幼兒を愛するとはいへず、わが子を知るとも愛するともいへない親だと思はなくてはなりません。

これまであつた人類の能力と罪と、さうして希望を受繼いでゐるのが、私たちの今見てゐる所のすべての幼兒です。さうして唯それだけでせうか。さうではありません。その外にいま一つ、一人々々その幼兒の生命に、それ／″＼に與へられてゐる新しい立場があります。それが本當の個性であり、人格であり、彼の權利であり使命であります。我々の影響によつてしか／″＼である所の我等のをさなご、我々の責任以外知る以外の獨自の立場を持つてゐるをさなご、實に我々の幼兒に對する思は複雜でなくてはなりません。我等の罪の方面から見る時に、幼兒は實にかはいさうな存在であり、能力の方面から見るときに喜ばしい存在であり、全然新しい獨自の人として見る時に實に嚴肅な存在であります。まづこの思を深く心に彫りつけて、我々の幼兒を見ることが出來る人は、眞に彼等を愛し得るに近い人、隨つて導き得るに近い人ではないかと思はれます。

（羽仁もと子著作集）

木端　丸子氏　江戸の俳人　安永二年(二四三三)歿

二二　世の中

木端（ぼくたん）

世の中は何のへちまと思へどもぶらりとしては暮されもせず　朱樂菅江

天の原月すむ秋をまふたつにふりさけ見ればちやうど仲麿　頭光

ほとゝぎす自由自在にきくさとは酒屋へ三里豆腐屋へ二里　唐衣橘洲

菜もなき膳にあはれは知られけりしぎやき茄子の秋の夕ぐれ　馬場金埓

朱樂菅江　本名山崎景貫　德川幕府の士　寛政十年(二四五八)歿　年六十

天の原　天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも（阿倍仲麿）

頭光　本名岸誠之　江戸の人　寛政八年(二四五六)歿　年七十

唐衣橘洲　本名小島恭從　江戸の人　享和二年(二四六二)歿

馬場金埓　本名大阪屋甚兵衛　江戸の人　文化四年(二四六七)歿

雪ならば　雪ならばいくたび袖を拂はまし花の吹雪の滋賀の山越（讀人不知）

雪ならばいくら酒手をねだられん花のふゞきの滋賀のやまかご　元杢網

田樂の木の芽にはらもはるの野や霞のおびをゆるめてぞ喰ふ　四方赤良

早蕨が握りこぶしを振りあげて山のよこつらはる風ぞ吹く　鹿津部眞顏

あらそはぬ風の柳の絲にこそ堪忍袋縫ふべかりけり　宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してはたまるも

元杢網　通稱大野屋喜三郎　江戸の人　文化八年(二四七一)歿　年八十一

四方赤良　本名太田覃　又の號は蜀山人　德川幕府の士　文政六年(二四八三)歿　年七十五

鹿津部眞顏　本名北川嘉兵衛　江戸の人　文政十二年(二四八九)歿　年七十七

宿屋飯盛　石川雅望　國學者　江戸の人　文政十三年(二四九〇)歿　年七十八

天地の　力をも入れずして天地を動かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はしむるは歌なり（古今集の序）

阿部次郎
哲學者
東北帝國大學教授
明治十六年山形縣生

のかは

二三　早春の賦

阿部次郎

余は一年の中のあらゆる季節を愛する。光と生命とに溢るゝ夏も、靜かに澄渡りつゝ靜まり行く秋も、自然の生命の墓の中に溫に雪に籠る冬も、盛なるにつけ、寂しきにつけ、靜かなるにつけ、悲しきにつけ、愁を含むにつけ、快活なるにつけ、漲り溢るゝにつけて、余は一年の中のあらゆる季節を愛する。

併しかくいふは、余の容易に同化し難き季節と余と最も調子の合ふ季節との差別があることを否定する意味ではない。梅雨の美しさや東京の冬の美しさを感ずるには、余にとつては、身心の特に強健で調節された情態が必要である。余の心の痛み易く感じ易きとき、葉蔭に熟する梅の實の美しさよりも灰色の空と肌を襲ふ濕潤の氣の厭はしさによつて、凜然たる霜晨の勇ましさよりも裸なる土と梢を搖る風の音の峻しさによつて、余の心は容易にかき亂される。

早春（川合玉堂筆）

之に反し、一年の中最もよく余の心と調べを等しくするのは、春

エレメント Element　本然の有機

の微かに動き始める頃、吹く風に遠山の雪の冷たさを傳へながらも日の光の肌に親しき頃、ぬくみ始めたる細流のほとりに青きものの漸く芽ぐむ頃である。その時自然の生命の營みは猶半ば大地の下に行はれて、中に籠る力はたゆたひつゝ、羞ぢらひつつ、しかも怠るところなき伸張を續けて行く。生命の車は未だ全力を盡くして急轉することをせずに、前途の遙けさを豫想しつつ、その靜かに緩かな廻轉を開始する。外に發するよりも內に籠ることを愛する余は懶惰にして急調の旋轉に堪へざる余は、而も內より溫む力を自覺せずには生き甲斐を感ずることを得ざる余は、一年の中、この季節に於て最も自己のエレメントにゐることを感ずるのである。

かくて余は晴れたる日は獨り野を行き、岡を行き、春淺き雜木林

の下蔭を行きつゝ、頰に冷たき風と背に溫き日の光とを貪り味はふ。書を讀みつゝ夢みるものは旅である。雨に籠りて夢みるものはまた旅である。

余は又早春に當つて、特に幼年の時を回想する。土の下に黑くなつて凍つてゐた雪もいつしか融けて、溫に日の光を吸ふ大地の面の日毎に擴り行くとき、久しぶりに草履を穿いて外出する喜に溢れつゝ、街道を過る雪解の水の小流れを跨いで獨樂を廻した時分のこと、雪の下に芽を出す笹筍の赤い頭や蕗の薹の青い頭を搜しまはる心のときめき、遠山の雪を眺めながら、雪解の水の碧く勢よく流れ行く山川のほとりに腰を卸して人生を思つた少年の頃、思へば此等の人生の早春も自分には既に流れ過ぎてしまつたのである。

高須芳次郎　文學者　號は梅溪　明治十三年大阪生
東湖　江戸末期の勤王家　藤田彪　水戸藩士　安政二年(二五一五)震死　年五十
烈公　德川齊昭　水戸藩主　萬延元年(二五二〇)薨　年六十一

やがて桃が咲き、櫻が咲き、霞が流れ、又櫻が散る。さうして自然は又余の特愛する第二の季節に――此の度は木々の梢の上にあつて、自然の力が再び籠りつゝ、羞ぢらひつゝ、すく／＼と伸びゆく晩春初夏の節に――入るのである。(北郊雜記)

二四　志士の文學

高須芳次郎

東湖は水戸の賢君、烈公を助けて勤王攘夷の國策に邁進した政治家である。が、彼は政治にのみ沒頭しないで、詩文の上にも、ずば抜けた手腕を持つた。彼の手に成る詩歌は平明流暢で口誦するに適してゐるが、その字句の裏には、燃ゆるやうな愛國の至情を湛へ、それが全體を力強く彩つてゐる。

烈公に重く用ひられた彼が三年間、幽囚の人となつたのは何故か。江戸政府の水戸強壓策に禍されたからだ。政府は開國の旗印を掲げたのに對して、親藩の水戸烈公が攘夷を標榜するのをひどく忌嫌つた。それ故、烈公に向つて、突然閉門謹愼を命ずるに及び、東湖も、その卷きぞへに逢つた。「罪なうして配所の月を見る。」といふのはこの事だ。東湖としては、江戸政府に對して、滿腔の不平なきを得ない。その不平が發して、彼の詩歌となり文章となつた。

が、流石に東湖は、不平のみに終始しなかつた。彼はその所信、至誠が必ず最後の勝利を得るであらうことを豫想した。彼はさうした感想を表白するについて、すべての人々を鼓舞し、感激せしめねばやまない情熱を以てした。彼は理性の働を忘れたのではないが、より多く情熱に動いた。その直感直覺がすぐに詩

弘化元年　仁孝天皇の御代將軍家茂の時（二五〇四）東湖この時三十九歲

小石川　小石川區小石川町水戸德川家上屋敷今の陸軍造兵廠のある處

向島小梅　水戸德川家下屋敷今の東京市本所區隅田公園の內隅田川の左岸に在る

吾妻橋　隅田川に架せる橋

となり歌となつたのである。

東湖が約三年間の幽囚生活をしたのは、弘化元年から同四年近くまでである。最初の一年は、小石川の官舍に幽居したが、翌年、向島小梅の下邸に幽せらるゝことになつた。その途上の作として「將に小梅に徙らんとして吾妻橋畔を過ぎ感あり。」の一詩がある。

藤田東湖

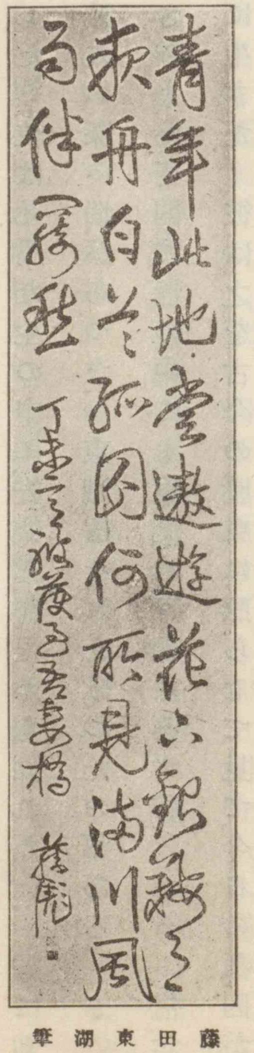
青年此の地嘗て遨遊す。花下の銀鞍、月夜の舟。

白首孤囚何の見る所ぞ。滿川の風雨羈愁に伴なふ。

いくらか兩鬢に白髮を交へた彼が墨田川の風雨に對して、過去に於ける得意の風流、今の失意に沈む境涯に想到して、感慨に打

淺草寺　淺草の觀音の寺

たれたのは、自然の人情だ。かうして小梅に落着いた彼の居所は、「舍の大いさ東西丈餘、南北二丈に盈たず。竈を前にし、厠を後にし、庭除一步ばかり……余が坐臥すべきもの僅々方四五尺に過ぎず。」と自記した通りである。その窮屈のほどが想ひやられる。幽囚中の彼は、時に夢魂寒く、鄕國水戸をさまよつた。それは春愁の深い靜夜のことである。



藤田東湖筆

半夜の疎鐘、淺草寺。一犂の膏雨小梅村。

春愁寂寞、人の問ふなし。閑に孤燈を剪つて旅魂に伴なふ。

天祥　宋の忠臣文天祥

又時には「人生字を識るは憂患の始なり。」といふ體驗を新にした。

幽囚許されず歸歟を賦するを。衣帶日に寛く、髩日に疎なり。

何者か尤も一身の累を爲す。滿腔盡くこれ古人の書。

東湖が罪なくして苦難を重ねるのは、一に古人の書によつて、正義の信念を植附けられたからだ。若し古人の書を讀まないとしたら、彼は凡庸な生の中に、安樂を得たかも知れない。茲に知識人の深い惱があつた。東湖はそれを歌つたのである。

さうした苦悶・懊惱の中にも、東湖は「正義は必ず勝つ。」といふ信念に生きた。彼は之を古今の歴史に照らして見て、今日の孤囚が後日の勝利者として輝くべく、又輝かねばならぬとした。そこから有名な獄中吟「天祥正氣の歌に和す」の雄篇が生れた。言ふ迄もなく、宋の文天祥の「正氣の歌」も獄中になつたのである。

父　藤田幽谷　水戸藩の儒者　文政九年(二四八六)卒　年五十三

孤囚の生活を送つた東湖が右の一篇を作つたについて、「序並に詞」の中で、その由來を述べてゐる。それによると、彼は八九歳の頃、その賢明な父から天祥の「正氣の歌」を教へられたのだ。その時父は盃を手にし、快く調子を附けて、これを朗吟し、「人間の正大の氣はこの宇宙に充滿してゐるのだ。」と口癖のやうに説いた。東湖はいつの間にかそれを諳誦して、三十餘年の後、孤囚となつた日、折に觸れ、時につれて「正氣の歌」を想ひ出したのである。それと共に、宋末の英傑天祥が宋の天子に對して飽くまで眞實をつくしたために、下獄せねばならなかつた受難に同感し、何人も動かすことの出來ぬ天祥の信念に共鳴した。かくて東湖は幽囚裡に筆を執つて鬱勃たる彼の所懷を左の如く歌つた。

刀水 利根川

天地正大の氣。粋然として神州に鍾る。
秀でて不二の嶽となり。巍々として千秋に聳ゆ。
注いで大瀛の水となり。洋々として八洲を環る。
發いて萬朶の櫻となり。衆芳與に儔し難し。
凝つて百錬の鐵となり。鋭利鍪を斷つべし。

以下、彼は史上の實例を引用して、正義の滅びない所以を歌つた。更に彼は「回天詩史」を作り、その國事のために、前後三度、死を決して、これに當つた次第を述べた。その回天詩といふのは、

三たび死を決して死せず。二十五回、刀水を渡る。
五たび間地を乞うて間を得ず。三十九年七處に徙る。
邦家の隆替偶然にあらず。人生の得失豈徒爾ならんや。

東湖はかく歌ひ來つて、尙至誠の一念が決して心頭を去らない

佐久間象山 江戸末期の先覺者 信濃松代藩士 名は修理 元治元年(二五二四)京都で横死 年五十四

ことを明らかにした。幽囚裡の公人としての彼は、いつも慷慨激越の氣を詞句に洩らしたが、その家庭の人としての彼は、打解けた物柔い調子で母や子に呼びかけた。

母君より「植ゑおきし一村薄穗に出でて招けど人はなど歸り來ぬ」とよみ給へりける返し參らすとて
招きなば人もこそ知れ篠すゝきしのぶ心は穗に出でずとも

子供へ武者かける錦繪といへるものつかはして
梓弓春のあそびのたはぶれも踏みなたがへそものゝふの道

情熱の人東湖の詩は以上の如くであるが、これを理性の人佐久間象山が獄裡で手記したのと對照して見ると、餘程趣を異にす

吉田松陰　江戸末期の志士で教育家　萩藩士　名は矩方　安政六年(二五一九)刑死　年三十

る。東湖は水戸の熱血漢であるが、象山は由來、理性に長けた信州人中の博識家だ。「省諐錄」を讀むと、暖い情味を示した部分もあるが、所詮、理性に徹しなければ已まない象山の俤が、はつきり映し出されてゐる。

象山が投獄せられたのは、東湖などと事情を異にし、門下の吉田松陰の渡米行を送る詩が彼に禍したためであつた。一篇の詩が、松陰の行李の中から見出されたといふことが、象山受難の原因となつたのだ。その詩のうちに、

「環海何ぞ茫々たる。五洲自ら隣を爲す。
周流して形勢を究めば、一見、百聞に超えん。」

の句がある。

象山が當時、國禁とせられた渡米に贊成したことは、今から見る

と、そんなに重い罪でないのだが、當時にあつては、容易に許されない行爲とされた。この事は、東湖が幽囚せられたに比べて、尚一段重い奇禍だつたといへる。眞に暗中の不意討に等しかつた。

が、象山は一切を運命だとあきらめて、獄裡に冥想し、沈思した。靈性の修養、それが彼の日課であつた。時に抑へ切れない感情が涌出すと、彼はそれを詩歌の上に表白して自ら慰めた。かくして成つた「省諐錄」には、短文五十七篇、賦一篇、感想文七篇、詩十二篇、短歌百十六首などが收められてある。

それらは、象山が單行本として公刊するために書いたのでなく獄中、意の動くまゝに記したものにすぎない。それを勝海舟が後に至つて出版したのである。「省諐錄」の題は卷頭の短文五十

餘篇を總括したところから來てをり、そこには象山が獄裡でどんな生活をしたかが、ほゞわかるやう記述されてある。その始に「行ふところの道、以て自ら安んずべく、得るところの事、以て自ら樂しむべし。罪の有無は我にあるのみ。外よりして至るものは、豈憂戚するに足らんや。」といつてゐるのを見ると、彼が不測の奇禍によつて下獄するとも、外部の強壓に原因する以上「少しも氣にかけなくともよい」と云ふ信念に立つてゐたことが看取せられる。

佐久間象山

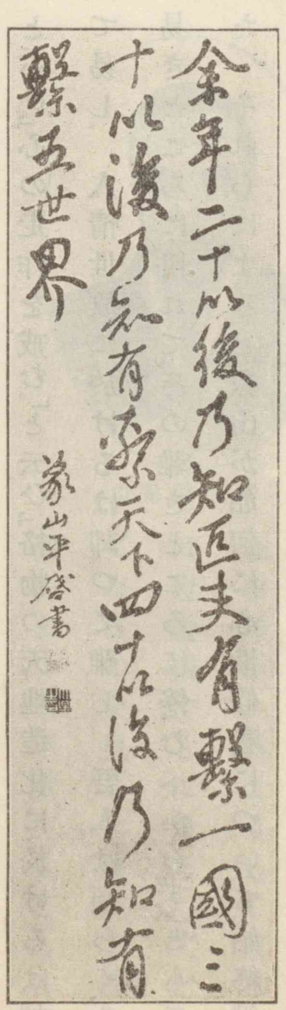
それゆゑ、彼は「たとひ予今日死すとも、天下後世當に公論あるべし。予また何をか悔い何をか恨まん。身は囹圄にありと雖も、心に愧詐なし。おのづから方寸の虚明、平日に異ならざるを覺ゆ。」と昂然自ら信ずるところを述べた。のみならず、理性明徹の彼は獄中、心の修養三昧につとめて、「一跌を經れば、一知を長ずと。果して虚語にあらず。振拔特立は可なり、激昂忿戾は不可なり。」と云ひ「心の走作を戒む。」と云ひ、「格物の天地造化に於けるは却つて易し。人情世故に於けるは却つて難し。吾人は須らく、その易きところに狃れて、その難きところに倦むべからず。」とも云つた。それらによると、象山が如何に心性修養について、始終鍛錬し工夫したかがわかる。その結果、彼はその任務の重きを自覺して、彼の行動・云爲が世界に影響するであらうといふことに想ひ及んだ。それで彼は、

「余年二十以後、乃ち匹夫も一國に繫る有るを知る。三十以後

は乃ち天下に繫る有るを知る。四十以後は乃ち五世界に繫る有るを知る。」

と云つた。

それほど象山は理性的に云爲した姿をはつきり見せてゐる。



佐久間象山筆

ところがこの人も一度、想を故園に馳せ、その敬愛する慈母のことに及ぶと、忽ち感傷的になつた。彼が獄中から同藩の三村靜山らに送つた手紙のうちに、

「聊か世の補にも成らず候うて、御上の御名を出し奉り候儀、實に恐入候。高年の老母もさぞかし無念にも存じ申すべく、さらぬだに物あんじ致し候性分に候へば、いかばかり心配も致し候はんと志の貫き候はぬについて存じ出し候へば、五體共に裂かるゝ如くに存じ申候。」

と述懷してゐる。その獄裡に不如歸(ほとゝぎす)の鳴いてゆくのを聞いた夜、老母を想うて、

をちこちに鳴くほとゝぎすこととづ
てましや

ほとゝぎす名のるところは五月雨の降らねど袖に露ぞこ
ぼるゝ

と歌つた。茲に至ると彼も亦情の人である。その「感情歌百首」は孤囚としての彼が、その眞意を世に認められたい一心から、切

妹 吉田松陰の長妹千代子で兒玉兵衛門に嫁した この文は安政六年四月十三日松陰が萩の野山の獄中から贈つたもの

靈神樣 吉田家祖先の靈を祭れるもの

切の情を披瀝したのであつて、

わがおもひ萩の下葉のそよとだにいふ人あらばうれしからまし

と長嘆したあたりに、無限の感慨が溢れてゐる。

二五 妹にさとす

吉田松陰

この間は御文下され、觀音樣の御洗米、三日のうち精進にて戴き候やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進・潔齋などは、隨分心のかたまり候ものにてよろしき事と存候につき、拙者も二月二十五日より三月晦日まで少々志の候へば、酒肴ども一向たべ申さず候。その間、一度靈神樣御祭のもの頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさ

ちんぢ 方言で微塵などの意 ちゞの訛か

までむづかしき事にもこれなく、御深切の事に候へば相果したく存候へども、當所にては、當りまへの精進の外にまた精進と申候へば、連中又は番人ども何故と怪しみ尋ね候につき、それをそれと相答へ候事面倒に存候故、八日より幸精進日なれば、その日一日に戴き申候。

抑、觀音信仰せよとの事は定めし禍をよけ候ためにあるべく、これには大きに論のある事に候へば、委細申進ずべく候。法華經第二十五の巻普門品と申す篇に觀音力と申す事悉く高大に述べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候へば、繩目にかゝり候へば忽ちぶつ〳〵と繩が切れ、人屋に捕はれ候へば忽ち錠・鍵がはづれ、首の座へ直り候へば忽ち刀がちんぢに折るゝなど申してこれあり候。これは拙者江戸の

江戸の人屋　安政元年(二五一四)三月下田の米艦に便乗して米國に遊ばうとしたが成らず四月江戸の獄に繋がれた

人屋にてこの經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれよりありがたき事はなしとて信仰するも無理はなく候。

吉田松陰

さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘・小乘と二つに分ちて、小乘は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乘にて申候へば觀音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰さするに御座候。これは人に信を起さするためなり。信を起すとは一心に有難い事ぢやとのみ思ひ込み、餘

都上り　法華經第七化城喩品にある

天竺王　迦毘羅城主淨飯王

念他慮なきことにて、一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりさへすれば、何事に臨み候うてもちつとも頓着はなく、縄目も人屋も首の座も平氣になれ候から、世の中に如何に難題・苦患の候うても、それに退轉して不忠・不孝・無禮・無道等仕る氣遣ひはなし。されど初から凡夫に、一心不亂ぢやの不退轉ぢやのと申し聞かせても、さつぱり耳に入らぬもの故に、假に觀音樣を拵へて人の信を起させ候教に御座候。之を方便とも申候。これにつきて、法華經に都上りの喩これあり、至極面白く候へども、事長ければ略し候。」さてまた大乘と申す方にては出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申候うても、立身出世など申す事には御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候處、若き時から感

の強き人にて、老人を見ては我が身も往くさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては我が身も往くさきは死なうかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲しみを起し、生老病死がこの世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまぬと志を立て、年二十五の時位を棄てて山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。（これにも色々有難き話があれども事長ければ略す。）さ候うて三十出山とて、僅か五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出て來て、それから世の人を教化せられたり。これが即ち出世法なり。故に出世せねば濟世が出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、即ちこの世の人を濟度することに御座候。

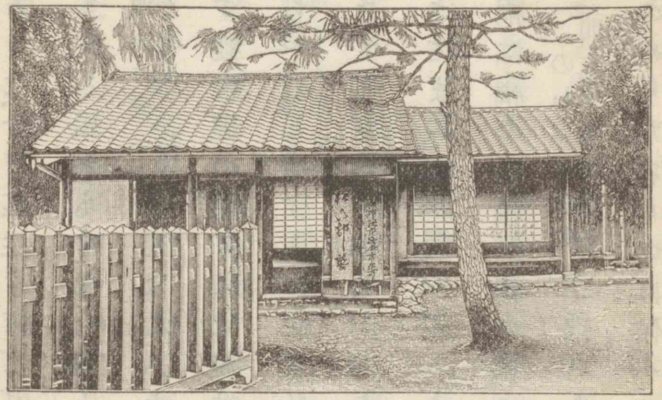
人間萬事塞翁が馬　淮南子にある話

扨その死なぬと申すは、近く申さば釋迦の孔子のと申す御方々は、今日迄生きてござる故、人が尊みもすれば有難がりもする、畏れもする。果して死なぬに候はずや。（孔子の教もやはりこの通りに候へども事長し、略す。）死なぬ人なれば、縄目も人屋も首の座も、前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成ぢやの大石良雄ぢやのと申す人々は、刄物に身を失はれ候へども今以て生きてござる。即ち刀がちんぢに折れたる證據なり。

さてまた「禍福縄の如し。」といふ事を御悟なるが宜しく候。禍は福の種、福が禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。（このわけは物知に問うて知るべし。）拙者など人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなるものに候へども、また一方には學問も出來、己のため、人のため、後の世にも殘り、かつ〲死なぬ人々の仲間

易の道　天道盈テルヲ虧キテ謙ナルニ益ス（易經）

人も出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出で候へ



松下村塾

ば、又如何なる禍の來んも知れ申さず候。勿論、その禍の中には福も交り候へども、所詮一生の間難儀さへすれば、先の福があるなり、何の効驗もなき事に、觀音に頼みて福を求むるやうの事は、必ず〳〵無益に存候。』尤も右の通り申候へば身勝手なる申分、不孝なる申分とも御存があらう。こゝにまた論あり。易の道は滿盈と申すことを大いにきらふなり。御互

七人兄弟　杉民治　吉田寅次郎　杉千代子（兒玉兵衛門妻）　杉壽子（小田村素太郎妻）　杉艶子　杉美和子（久坂義助妻）　杉敏三郎

ふざま　方言で運の意

かるうた　方言で引受けたの意

に七人兄弟、拙者は罪人、艶は夭折、敏は啞子、ふざまのわるきやうなるものなれど、又あと四人は何れも可なりに世を渡られ、特に兄様・そもじ・小田村は兩人づつも子供があれば不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家を見くらべよ。是程にも參らぬ家は多きもの。近くはそもじの家にても、高須などにても、兄弟の内にはふざまのわるき人も隨分あるなり。然れば父母兄弟の代りに拙者・艶・敏の三人が禍をかるうたと御思ひ候へば、父母の御心も濟む譯には候はずや。

且杉は隨分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却つて杉が氣遣ひなるものならずや。拙者身の上は前に申す通り、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は隨分

山宅　松陰の實父杉常道隱棲の地　萩城の東方護國山の麓に在つた

小太郎　兄民治の子

あるが、杉は今にては御父子御役にて何も不足のない中なれば、子供等がいつもこの樣なるものと思うて、昔山宅にて父樣・母樣の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても眞とは思はぬ程なれば、この先、五十年・七十年の事をとくと手を組んで案じて見やれ。氣遣ひなる者にては候はずや。去年も端午の客の多きを、人はめでたい、めでたいと嬉しき顏すれど、拙者は何分先の先が氣遣ひにてたまらぬゆゑ、始終稽古場に屈んで、人の知らぬ處にては獨り落涙したる程の事なりき。もしや、萬一、小太郎にても父祖に似ぬやうなる事があつたらば、杉の家も危し〳〵。父母の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にても、そもじまでぞ。小田村でさへ山宅の事はよくは覺えて居るまじ。まして久坂なんどは猶

以てのこと。されば拙者の氣遣ひに觀音樣を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に「樂が苦の種、福は禍の本。」と申す事をとくと申して聞かする方が肝要なり。

なほまた一つ、拙者不孝ながら孝に當る事あり。兄弟內に一人にてもふざまのわるき人あれば、あとの兄弟は自然と心が和らぎて孝行にてもするやうになる、兄弟も睦まじくなるものなり。これからは、拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受合ふから、兄弟中は拙者の代りに父母に孝行してくるるがよし。左樣あれば、つゞまるところ兄弟中皆よくなりて、はては父母の御仕合はせ、また子供が見習ひ候へば、子孫のためこれ程めでたき事はなきにあらずや。よく〳〵御勸辨候うて、小田村・久坂なんどにもこの文御見せ、佛法信

下田次郎　教育學者　文學博士　東京女子高等師範學校教授　明治五年廣島縣生

大船　東海道大船驛　横須賀線の分岐點

國府津　熱海線の分岐點

仰はよき事なれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと、をりをり御見候へかし。心學本に、

のどけさよねがひなき身の神詣で

神へ願ふよりは身に行ふが宜しく候。（松陰先生遺著―俗簡襍録）

二六　生活と希望

下田次郎

人は希望に生きる。希望は人に元氣を與へ、力をつけ、堪へ難い事にも堪へしめる。たとへば、東京から汽車で名古屋まで行かうと思つて、乘車はしたが滿員で立つてゐるとする。大船まで來たら、坐れるだらうと辛抱する。しかし大船でも坐れなかつた。今度は國府津まで來れば坐れるだらうとこらへて居る。國府津でも駄目であつた。それなら沼津でと、遂に立通して名古屋まで行くことがある。これは次の驛では坐れるだらうといふ希望に繋がれゝばこそ、最後まで立つて居れるのである。これが東京から名古屋まで立通しといふことが、始から分つてゐたら、誰でも乘る者はあるまい。そのやうなもので、同じ生活でも、希望のあるのと、ないのでは、その生き方に大なる相違を來すのである。

生活といふものは、次ぎ〳〵に希望をおいて、これを實現せしめようと努力して居る時が、一番張りがあつて、面白いのである。希望が滿たされゝば、それはもはや希望でなくなり、當り前の事となつて、面白くなくなる。それでまた次の希望を設けてこれを滿たさうと努める。つまり子供が蜻蛉を取るやうなもので、それを見つけて追つかけて居る間が一所懸命で、一番面白いの

古人　支那の漢の武帝その秋風辭にある語

ダンテ　Dante (1265—1321)　伊太利の大戲曲家

であつて、取つてしまへば何ともなく、また次の蜻蛉を追つかけるのである。さうして見ると、生活といふものは、いつも希望をもつて、これを追つかけて居るのが、最も味はひがあるので、幸福な生活といふのはそれに外ならぬのである。希望の滿たされた時は、汽車が一休みした時で、休んだならばまた進行するのである。それで生きがひのある一生は、努力の一生であつて、生活はいつも努力の途中であらねばならぬ。死もまた前途に希望を持ちながら死ぬより、幸福な死に方はないのである。

すべての希望が滿たされた狀態は恐しいことである、嘆息なことである。後に希望が殘つてゐないからである。「歡樂極つて哀情多し。」と古人も言つた。歡樂も頂上に達すると、次に來るものは物足らなさであり、あはれである。イタリヤの詩人ダンテ

ヴァージル　Virgil (前70—前19)　羅馬の詩人

アーチ　Arch

フランクリン　Franklin (1706—1790)　米國の政治家科學者

の「神曲」の中に、ダンテがローマの詩人ヴァージルに案内されて、地獄を見物するところがある。共に連立つて地獄の門に來ると、門の上のアーチに「こゝに這入る者はすべての希望を置いて行け。」と書いてあつた。卽ち地獄は希望のない處であつて希望のない生活が卽ち地獄なのである。それで人は生きて居る以上は、とにかく希望を持つことにしたい。希望のある所には生命がある。絕望はおしまひである。持合はせの希望がなければ、どんなに小さく、見すぼらしいものでもよいから作るがよい。「七轉び八起き。」といふのも、希望に生きるのである。よしや希望は達せられないでも、希望をもつて居る間は生きる力がある。「希望に生活する者は、絕食しながら死ぬことが出來る。」とフランクリンは言つた。生埋めになつた鑛夫も、外から救が來るであ

蜻蛉なんど　平家物語の文

らうとの希望に生きるのである。

希望は人に力を與へ、勇みをつけるが、その反對に希望がなくなると、がつかりして弱り、死ぬこともある。僧都俊寛が鬼界ヶ島に流されて、成經・康賴と共に居た時は、赦免の希望に生きて居たが、他の二人が都に喚還されて、自分一人殘されてからは急に弱つて、「蜻蛉なんどの如くに瘦せ衰へ」遂に死んでしまつた。希望は生活に張合をつけ、困難に打勝たしめ、不退轉の努力を續けしめることが出來る。希望を達しようとの努力には、苦勞が苦勞にならず、困難が困難にならない。それで生活は、希望さへあれば大丈夫である。いかに富み足つても、希望のない生活は氣の毒である。いかにみすぼらしくとも、希望に生きる生活は幸福である。しかし希望といつても色々あるが、その大小を問はず、

カーライル　Thomas Carlyle (1797—1881)　英國の文學者

イソップ　Æsop　紀元前六百年頃の人　動物を主人公にした寓話の大家

希望は正善な、又は醇美な、少くとも無邪氣なものでなくてはならぬ。又遠大な希望を追ふよりも、手近な實行性の多い希望を懷くことにしたい。又希望は空想であつてはいけない。それを達すべき確實な手段をも併せ考へなければならない。イソップの寓話に、田舍娘が牛乳桶を頭に載せて歩きながら考へたこの乳を賣つて、卵を買つて、雞にして、それを賣つて、新しい着物を買つて、宴會に行くと、若者が結婚を申込むに違ひない。その時は皆斷るのだと、首を振つたところが、桶が頭から落ちて元も無くなつたといふのがある。空想は人を誤らせることがよくある。それで確實な希望を設けて、次ぎ〳〵にこれを實現しようと精進することとしたい。つまりは人生の標語は英國の文豪カーライルの言のやうに「働け、そして絶望するな。」といふこと

にあると思ふのである。（婦人と希望）

新定女子國文卷六終

昭和八年一月十八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

昭和貳年九月廿五日印刷
昭和貳年九月廿八日發行
昭和三年一月廿四日訂正再版發行
昭和七年八月廿二日訂正三版印刷
昭和七年八月廿五日訂正三版發行
昭和八年一月九日訂正四版印刷
昭和八年一月十二日訂正四版發行

不許複製

新定女子國文
改訂版
【全十册】

新制度
定價

卷一	金六拾參錢
卷二・三	各金六拾貳錢
卷四	金六拾壹錢
卷五・六・七・八	各金五拾九錢
卷九・十	各金五拾八錢

著作者　吉田彌平

發行兼印刷者　東京市神田區神保町三丁目八番地　金港堂書籍株式會社

代表者　原亮七郎

印刷所　東京市牛込區榎町七番地　大日本印刷株式會社榎町工場

發賣所　東京市神田區神保町三丁目八番地　金港堂書籍株式會社　振替貯金口座東京八八一五番